

VIEW21

〈ビュー21〉

高校版

Volume 2

2015
June

6月

新課程入試からの メッセージ

特集

新課程全学年全面実施年に考える●

2015年度入試に見る これからの指導のあり方

指導変革の軌跡

東京都・私立

明治大学付属明治高校・中学校

石川県立 金沢北陵高校

改良! 指導ツール ビフォーアフター

2年生・夏休み前後

オープンキャンパス指導ツール

半歩未来を考える教育オピニオン

「高大接続改革実行プラン」を

高校現場はどう考えるか

ハートを
こがせ!

Vol.02

福井県立藤島高校
かるた同好会

部員ゼロからの再興
19年ぶりに「全国」の
キップをつかんだ同好会

部室も顧問もナシ。
自分たちの力と責任で
高い目標を目指す!



50枚の札を巡って
集中力と瞬発力で戦う
畳の上の格闘技

2

1 競技かるたは、百人一首100枚の字札（下の句が書かれた札）のうち、25枚ずつを自陣と敵陣に並べて行われる。詠み上げられた上の句を聞いて、下の句の札を自陣・敵陣から素早く取っていく。詠み手は100枚の札の中から詠んでいくため、詠まれた札が自陣・敵陣どちらにも存在しない場合がある。

2 団体戦の多くは5人制。部員数が5人に満たないと、不足人数分は不戦敗扱いとなってしまう、不利な戦いを強いられてしまう。2014年の全国大会出場時の同校のかるた同好会の部員数は3年生3人、2年生2人、1年生2人の総勢7人。「部員数5人以上」は同好会存続の鍵でもある。

3 藤島高校かるた同好会の練習場所は、教員用の休養室。備品置き場も兼ねているため、飛ばされた札が物陰に隠れ、練習が中断してしまうこともしばしば。



1



3



空き部屋に運んだ古畳の上から
目指すは「かるた甲子園」!

福井県立藤島高校かるた同好会は、2014年、滋賀県大津市の近江神宮で毎年開催される「全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会（「近江神宮大会」「かるた甲子園」などと呼ばれる）」に、19年ぶりに出場した。12年4月の時点で、同好会の部員数はゼロだったが、3人の新生が入会を再スタートさせ、その2年後、ほとんどの部員が他部と兼部しながら、見事に全国大会出場の栄誉を手にした。「畳の上の格闘技」とも言われる競技かるたに魅せられ、同好会を復活させたメンバー、そして後輩たちの熱いハートに迫る。



5

4 競技かるたには、審判はいない。同時に札を取った時は、競技者同士による話し合いで決着をつけるが、どちらも譲らないままでは会場全体の進行を滞らせてしまう。我を通し過ぎては皆の迷惑になり、弱気一辺倒ではチームの勝利が遠のいてしまう、難しい競技だ。

5 全国大会に出場したとはいえ、位置付けはあくまでも同好会。正規の顧問もおらず、部室もない。続けるのも解散するのも生徒の自由というわけだ。つまり、同好会の運命は全て生徒のやる気に懸かっているのだ。

新課程入試からの
メッセージ

◎数学と理科が新課程での実施となった2015年度入試。全体としては、大きな変化はなかったというのが大方の見方です。しかし、変わらない中にも、今後の入試や指導につながるメッセージがあるのではないのでしょうか。今号の特集では、新課程入試からのメッセージを、先生方と共に考えたいと思います。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木崇

2 チカラ アワセテ

生徒の夢をかなえるために「手加減なし」の関係であり続ける
愛媛県・私立新田青雲中等教育学校 進路課◎菊池岳史、森實宏之

4 特集

新課程全学年全面実施年に考える② 2015年度入試に見る これからの指導のあり方

6 座談会

新課程入試が求める「考え抜く力」を、
普遍的な「学び方」の習得と生徒の主体性を重視した指導で育む
横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校 山本俊太郎 / 新潟県立新潟高校 堀越康裕
愛知県立半田高校 榊原 学 / 京都市立西京高校 岩佐峰之
株式会社ベネッセコーポレーション 高校事業部情報企画課 課長 日山敦司

12 実践事例①

「自調自考」の精神を根底に据え、主体的な学習者を育成
東京都・私立渋谷教育学園渋谷中学高校

16 実践事例②

英語の重点化、体系的な探究学習で「質実剛健にして未来の俊傑」を目指す
新潟県立新発田高校

20 実践事例③

失敗や試行錯誤を経験させる探究学習が「生きる力」を育む
富山県立富山中野高校

24 ハートをこがせ!

福井県立藤島高校 かるた同好会
才能が問われる勝負の世界で「自分の目標」に挑む

26 指導変革の軌跡

東京都・私立明治大学付属明治高校・中学校
基礎学力向上◎学力向上の施策を投入 社会で活躍できる力を育む付属校に
石川県立金沢北陵高校
基礎学力向上・表現力育成◎「北陵+」[「北陵 α 」]で基礎学力の定着と表現力の育成を図る

34 改良! 指導ツール ビフォーアフター

2年生・夏休み前後 オープンキャンパス指導ツール

38 半歩未来を考える教育オピニオン

「高大接続改革実行プラン」を高校現場はどう考えるか
東京都立西高校校長◎宮本久也 岡山県立和気開谷高校校長◎香山真一

42 未来をつくる大学の研究室

「全固体二次電池」の実用化を進め 電子機器の安全性と性能を高める
大阪府立大大学院 工学研究科 辰巳妙昌弘研究室

46 VIEW'S REPORT

「OECDイノベーション教育ネットワーク」(※名称調整中)発足記念シンポジウム
OECDの全面協力の下で発足 産学コンソーシアムが描く次世代の学びとは

52 Reader's VIEW

<http://berd.benesse.jp> 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます
*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製および転載を禁じます



愛媛県・私立新田青雲中等教育学校 進路課
菊池岳史 + 森實宏之

生徒の夢をかなえるために 「手加減なし」の関係であり続ける

「生徒のために」を胸に
いつも本音で語り合う

菊池 今から4年前、本校創立から9年目に森實先生と一緒に進路課に配属された時に、「お互いに手加減なしでいこう」と話をしましたよね。

森實 はい、よく覚えています。「進路室は生徒の夢をかなえる最前線であり、私たちの仕事の全ては、生徒の未来に還元されるという覚悟で臨もう」と菊池先生は私におっしゃいました。そして、私が忙しさを言い訳にしている時などに、その甘さをはつきりと注意してくださったことも何度かありました。目の前のことで頭がいっぱいになりがちな私は、学校や生徒の未来を常に考えるという教師としての姿勢を菊池先生に教わりました。

菊池 中高一貫校としての進路指導のあり方を構築しながら、教材研究にも取り組む。そんな濃密でハードな日々を一緒に過ごしてきたから、森實先生を信頼し、「それが生徒のために最善の指導なのか」といったことを遠慮なく伝えられたのだと思います。

森實 それでも、菊池先生は私を気づかって、手加減してくださっているよ

ですよね。「あの時は、実はかなり手加減したからね」と、笑顔で教えてくれることがよくありますから。

菊池 生徒のためを考えれば、共に働く同僚とはいえ妥協は許されないけれど、一方で、森實先生が一生懸命やっているということも、よく分かっています。だからこそ、はつきり言い合えるけれども、お互いを思いやれる関係でありたいと私は思っています。

多くの同僚と共に

体系立った指導を磨き上げたい

菊池 進路課が今、力を入れていることは、6年一貫の進路指導システムを磨き上げ、教師と生徒で共有することです。昨年度、学年主任と教科主任が一堂に会して、6年間の進路行事の意義や相互の関連性について、生徒と教師双方の視点で言語化する取り組みを行いました。約4か月にわたり議論を重ねましたが、それぞれの教師の持ち味を生かしながらも、目指すゴールを共有する良い機会になったと思います。

森實 例えば、中学校で職業研究が始まる時期になってから、急に職業のことを話題にするのではなく、日頃から少しずつ社会とのかかわりを考えるよ

貪欲に、そして協働的に、
より良い指導を構築したい

学校とは、生徒の夢をかなえるためのスタート地点だと私は思っています。教師の言動は、全て生徒の未来につながっていくからこそ、「頑張ります」といった言葉だけで済ますことは、私たちには許されません。だから、森實先生とはお互いに妥協することなく、いつも本音で語り合ってきたのです。進路課の仕事も教科指導も、現状に満足してしまっただけは成長はありません。常に、「もっと良くなるはずだ」「まだまだこれからだ」と貪欲であり続けたいと思います。進路課として、これからも先生方の声に耳を傾け、質の高い6年一貫の進路指導を協働的に構築していきます。



愛媛県・私立新田青雲中等教育学校
菊池岳史 42歳

きくち・たけし 教職歴17年。同校に赴任して11年目。国語科。進路課長。九州産業大学付属九州産業高校を経て、新田青雲中等教育学校へ。

にっ た せい う ん
愛媛県・私立新田青雲中等教育学校

◎「健全有為な人材の育成」と「優秀な船長の育成」を教育理念として開校。「徹底した学力養成」を目指したカリキュラムを構築し、少人数の習熟度別授業や選択授業、個別指導など、個に手厚い指導を展開。更に、「剣道」「柔道」「弓道」「茶道」「華道」を授業に取り入れた「心の教育」、海外研修や学校行事を通じた「感動の教育」にも重きを置く。また、近年「グローバル力の育成」にも全校体制で取り組んでいる。

◎設立 2003 (平成 15) 年 ◎形態 全日制/普通科/共学 ◎生徒数 1学年約 100 人

◎2015 年度入試合格実績 (現浪計)

国公立大は、北海道大、大阪大、神戸大、岡山大、愛媛大などに 38 人が合格。私立大は、早稲田大、中央大、東京理科大、明治大、同志社大、関西学院大、関西大、立命館大などに延べ 227 人が合格。

◎ URL <http://www.nitta-seiun.ed.jp/>



うな問い掛けをするなど、生徒の成長を見通した指導の大切さを私は学びました。6年間の指導の流れをみんなですべて体験して、「こういう活動が学校力の底上げにつながるのだ」と実感しました。

菊池 他校の指導をそのまま持つてくるのではなく、本校の教師が、生徒の表情を思い出しながら、自分たちで指導計画を磨き上げていくという喜びを教師全員で共有することが大切なのだと思います。更に、進路課としては、課題探究型の学習活動やアクティブ・ラーニングの導入などについて、先進

事例から学びながら、校内に情報発信をしていくことも今後の目標ですね。

森實 いろいろな人脈を駆使して最新の情報を収集する菊池先生のことを尊敬しています。私も、「教師の勉強不足によって、生徒が不利益を被るようなことは絶対に許されたい」と肝に銘じて、学び続けていきたいです。

菊池 私が研究報告書などを読んでみると、森實先生はすぐに「それ、何ですか？」とのぞき込んできますよね。たくさん仕事を抱えながらも、新しいことに関心を持つとうとする姿勢に私も刺激を受けています。

**意見の衝突を恐れられない
 「強い教師」になりたい**

本校は比較的若い世代の教師が多い学校です。他の分掌の先生方と積極的にコミュニケーションを取り、校内の様々な意見を吸い上げていくことが、進路課の若手教師である私に期待されていると思っています。それぞれの先生方にはそれぞれの思いや考えがありますから、時には意見がぶつかることもあるでしょう。でも、生徒のことを考えたら、衝突を恐れるわけにはいきません。私も菊池先生のように、自分の責任を全うしながら、周囲の先生方に分かりやすい言葉で説明し、良い影響を与えられる教師になるのが目標です。菊池先生のような「強い教師」になりたいのです。



愛媛県・私立新田青雲中等教育学校
森實 宏之 35 歳
 もりざね・ひろゆき 教職歴 11 年。同校に赴任して 12 年目。地歴公民科主任。進路課。

特集

新課程全学年全面実施年に考える②

2015年度入試に見る これからの指導のあり方

数学と理科が新課程での実施となった2015年度入試。

今号は、センター試験、及び個別学力試験の出題内容を振り返り、どのような力が求められたのか、そして、その力を育むには、どのような指導が必要だったのかを考える。

更に、そうした指導を実践しながら、2015年度入試にも対応した学校の事例を通して、指導を具体化していく。

Q 理科・数学が新課程での出題となった2015年度入試ですが、ご担当教科・科目のセンター試験、及び個別学力試験の出題内容をご覧になって感じられたことを教えてください。

- ◎センター試験の数学で、特に「数学Ⅱ・B」では思考力を問う出題が多く、これを「メッセージ」と捉えた。急な転換とも受け取れたが、この流れにはおおむね賛成であり、今後は低学年次から意識して授業を展開したい。(愛知県)
- ◎判断力、分析力(問題把握能力)が重要であると痛感した。泥臭く試行錯誤できない今の生徒たちにその重要性をどう伝え、実践できるだけの力を身に付けられるかがポイントとなる。(愛知県)
- ◎新課程になって理科の出題範囲は大きく変わったが、出題の仕方や内容には今までと大きな違いは感じられなかった。新課程ということで、もっと新しい傾向の出題があるかとも予想していたが、オーソドックスな展開であったと思う。(岩手県)
- ◎センター試験の理科は、教科書の内容をしっかりと読み取れているかどうか、高得点の鍵を握る問題であると感じた。(広島県)
- ◎日本史は大きな変化は見られなかったが、世界史では新課程を意識した出題が見られた。(静岡県)

出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは、2015年2月にウェブとファクスで実施。有効回答数は54

1 2015年度入試の振り返りから考える 今後の指導

座談会 [P.6~11]

新課程入試の数学・理科で共通して求められた力

「考える力」「考え抜く力」

指導の
キーワード

- 読解力・表現力や学びの目的を土台とした、**普遍的な「学び方」**の習得
- **基礎学力**の徹底
- **生徒の主体性**を重視した授業展開
- 教師及び生徒による**学校としての指導理念**の共有

「『学び方』を身に付ける上での土台として、『なぜ、学ぶのか』という問いに対し、自分なりの答えを持つことが求められます」

京都市立西京高校 **岩佐峰之**

「『生徒に任せるより、自分たちが教えた方が早いし、確実だ』などと焦らず、集団として、そして個人として、生徒自身の学びが深まるのを我慢強く待つようにしています」

新潟県立新潟高校 **堀越康裕**

「普段の授業においても、教師と生徒が一緒になって考えるような探究型の学習活動を適宜設定していくことも、基礎学力の大切さを実感させる上では重要になってくるでしょう」

愛知県立半田高校 **榎原 学**

「生徒主体の学習活動は、多くの学校にとって新しい挑戦であるからこそ、その手法について論じる土台として、『こういう人材を育てたい』という目標の言語化が必要なのだと思います」

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校 **山本俊太郎**

2 新課程入試に対応した学校の事例から 指導を具体化する

東京都・私立
渋谷教育学園
渋谷中学高校
[P.12~15]

◎自ら調べ、考えて正誤を判断し、責任ある行動が出来る「自調自考」の精神を、学校生活のあらゆるところに浸透させている。

◎中学1年生～高校2年生で行う校外研修では、全ての計画を生徒たちだけで立てる。「自調自考」の精神を最もよく反映した活動。また、生徒が自由に課題を設定し、解決を目指す探究学習であり、卒業要件の1つでもある「自調自考論文」で、課題発見・解決力を養う。

新潟県立
新発田高校
[P.16~19]

◎恒常的な課題であった英語の学力低下に対応するため、新入生にはまず英語の学習法を丁寧に指導するなど、「スロースタート」にして「高1ギャップ」と呼ばれる移行期をスムーズに。

◎主体的に課題を発見・解決が出来る力や意欲を育てるために、3年間で体系的な探究学習に取り組む「未来の俊傑プラン」を「総合的な学習の時間」で実施。体系的・継続的なプログラムにすると共に、生徒自身が活動し、考え、発表するというサイクルを組み込んだ。

富山県立
富山中部高校
[P.20~23]

◎主体的に学びを追究する力を育むために、探究科学科を設置。1年生では、教科横断型の学びで、探究の基礎となる考え方や意欲を育む「基幹探究」を、2年生では、テーマ決定からグループ構成まで生徒主体で進める探究学習を行う「発展探究」を実施。

◎教師間で「育てるべき生徒像」などを語り合った結果、自ら学ぶ姿勢を育むために、提出必須の課題量を半減させ、それ以上の家庭学習は生徒の自主性に委ねることにした。

指導における軽重、精選が求められた新課程入試

日山 2015年度入試は、数学と理科が新課程での実施となりました。両教科共に旧課程と比較すると履修内容が増しましたが、既卒生への配慮もあつたためか、特に個別学力試験においては、出題内容に総じて大きな変化はありませんでした。そこで数学、理科の先生方に向き合ったかをおうかがいます。

堀越 本校の数学では、「この分野はじっくり時間を掛けて教えよう」

新課程入試が求める「考え抜く力」を、普遍的な「学び方」の習得と生徒の主体性を重視した指導で育む

数学と理科が新課程での実施となった2015年度入試。社会環境の変化に対応すべく改革が進む大学入試や大学教育、そして今後の高校教育のあり方を考える時、2015年度入試はどのような意味を持つ入試だったのか。4人の高校教師が、今と未来をつなぎながら振り返る。

「ここは次の段階で深めよう」というように、教科全体の流れを見通した上で、計画的に指導することで、学習量の増加による消化不良を防ぐことが出来たと思います。例えば、「数学A」に新たに加わった「整数の性質」では、あれもこれもと生徒に多くを教えることよりも、まず「係数の大きい1次不定方程式を解けるようにする」ことを教科団の共通目標にしました。一方、やはり新課程からの分野である「数学I」の「データの分析」は、それほど時間を掛けずに短期間で終わらせました。更に、他の科目でも、分野や単元の履修順



横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校
山本俊太郎 やまもと・しゅんたろう

教職歴24年。同校に赴任して7年目。14年度まで4年間進路指導部主任を務め、現在2学年主任。担当教科は国語。
横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校◎2009(平成21)年創立。スーパーサイエンスハイスクール、スーパーグローバルハイスクール指定校。15年度入試では、国公立大は、東京工業大、京都大などに90人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ512人が合格(現浪計)。海外大学には2人が進学。



新潟県立新潟高校
堀越康裕 ほりこし・やすひろ

教職歴23年。同校に赴任して8年目。進路指導室主任。担当教科は数学。
新潟県立新潟高校◎1892(明治25)年創立。普通科と理数科を持ち、理数科は2年次からサイエンスコースとメディアカルコースに分かれる。15年度入試では、国公立大は、東京大、京都大、大阪大などに155人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大などに延べ242人が合格(現役のみ)。

序を柔軟に入れ替えて、効率よく指導することを心掛けました。

岩佐 本校では、カリキュラム全体を見直し、理科の授業時数を増やしたため、理科は早めに教科書の内容を終えられました。新学習指導要領では、「理数教育の充実」が主な改善事項の1つとして挙げられています。したがって、他教科の協力もスムーズに得られました。ただ、授業時数が



愛知県立半田高校（はつた）

榎原 学 さかきばら・まなぶ

教職歴28年。同校に赴任して15年目。進路指導主事。担当科目は物理。

愛知県立半田高校◎1919（大正8）年創立。スーパーサイエンスハイスクール指定校。15年度入試では、国公立大は、東京大、名古屋大、京都大などに154人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大などに延べ577人が合格（現役のみ）。

増えた分、理科への興味・関心が高くない生徒に対する配慮が必要だと考え、社会に出てからも求められる理科の知識の重要性を、様々な場面で話すように心掛けました。文系志望の生徒にも、理科の面白さや重要性をこれまで以上にしっかりと伝えていかなくはならないと実感した3年間でした。

榎原 物理の授業では、覚えている



京都市立西京高校（きやう）

岩佐峰之 いわさ・みねゆき

教職歴25年。同校に赴任して8年目。主幹教諭。教育企画・中高一貫教育推進部部長。担当科目は化学。

京都市立西京高校◎1886（明治19）年創立。未来社会創造学科インタープリティング科を設置。スーパーグローバルハイスクール指定校。15年度入試では、国公立大は、京都大、大阪大、神戸大などに157人が合格。私立大は、慶應義塾大、同志社大、立命館大などに延べ343人が合格（現役のみ）。

かどうかを確かめる活動よりも、覚えたことを活用し、更に考えを深める活動に重きを置きました。活用したり、考えたりする作業にはやはり時間が掛かりますから、その分、覚えなくてはいけない知識事項についての学習は、こちらからポイントを説明した上で、家庭学習でしっかりと取り組んでおくように指導しました。2016年度入試以降、活用する力や表現する力を求める「新課程らしさ」は更に強まっていくでしょうから、旧課程よりも増えた学習内容を計画的に指導し、教材も精選することが一層求められるでしょう。

読解力、表現力は普遍的な「学び方」を習得する上での土台

日山 新課程では「言語活動の充実」も求められています。言語運用力という観点で、国語科として、山本先



（株）ベネッセコーポレーション
高校事業部情報企画課 課長
日山 敦司
ひやま・あつし

生は2015年度入試をどのようにご覧になりましたか。

山本 本校は「先端科学技術の知識を活用して、世界で幅広く活躍する人間」の育成を目標としており、およそ8割の生徒が理系学部に進学します。ただ、2015年度入試以前から感じていることではあります。読解力が乏しいために、理数教科で思った通りの成果を上げられない生徒が少なくないのです。

岩佐 私も、本校の国語科の先生と読解力の重要性について話すことがあります。例えば、京都大の化学の入試問題の大問数は4問ですが、問題文の字数を合計すると4000字から5000字になります。180分で理科2科目に取り組むことを考えても、読解力は不可欠でしょう。

榎原 生徒を見ると、問題文をよく読まず、図だけを見て直感的に解答しようとしていることが多いと感じます。中学校までの学習で、条件反射的に答えを出すことが癖になってしまっているのかもしれない。そのため、問われていることと



かみ合わない解答を書いてしまうのでしよう。読解力以前に、文章をじっくり読むことの大切さを理解していない生徒もいるように思います。

岩佐 原子や分子はどんなものか、イメージは出来るけれど、言葉でうまく説明できない生徒がいますが、それも教科書をじっくり読むことが出来ていないことが原因だと思いません。教科書を熟読し、定義をしつかり押さえさせる必要性を感じます。

Column

2015年度 新課程入試 数学・理科の振り返り



数学・堀越先生

センター試験では、「数学Ⅰ・A」の第3問「データの分析」が、データとグラフの関係を正確に読み取る必要がある点で、新課程らしい問題でした。「数学Ⅱ・B」は、計算量が多い点は例年通りでしたが、三角関数の偏角が 7θ で与えられる、微分係数の定義が問われるといった、目新しい問題も散見されました。個別学力試験では、旧帝大を中心に、小問の誘導に頼らずに解答の糸口を見つける力がより求められました。



物理・榊原先生

センター試験では、「物理基礎」の第3問「力学」の問題は、実験などを通してばねについてきちんと考えたことがあるかどうかで、難しさは大きく違ったはずで、物理現象について具体的に考える力を測るという意味では、この問題は新課程らしい良い問題だったと思います。個別学力試験については、筑波大の大問3が、問題文をしっかりと読み取って考察する必要があり、公式を覚えているだけでは解けない良問です。



化学・岩佐先生

センター試験では、定性的な問題だけでなく定量的な問題が増えました。旧学習指導要領では定量的なことは発展的な学習の分野で扱っていましたが、今回の入試では旧「化学Ⅰ・Ⅱ」で発展的な分野とされていたところが出題されています。個別学力試験では、京都大の大問4が、核酸塩基の構造式を答える問題で、教科書に載っている内容ではありますが、幅広く学習しておく必要があるため、現役生には不利だったでしょう。

榊原 我々教師でも、教科書の記述に感心させられることがしばしばあります。教科書は、生徒にとつて、じっくり読むほどに新たな発見がある教材として、大切にさせたいものです。

堀越 以前、東京大理科Ⅲ類に合格した生徒が、入試が近づくに連れ、教科書をよく読んでいたと話していました。学力の高い生徒ほど、教科書を使った地道な学習を大切にしてい

いるのだと思います。

岩佐 京都大理学部に合格した生徒が、センター試験の2週間ほど前、ぼろぼろになった教科書を携えて私のところへ質問に来たことがあります。いろいろな問題に当たり、改めて教科書を読んだことで、自分なりの疑問が生まれたというのです。授業での実験や大学教授による出張講義など、科学的な体験を経た上で教科書を深く読み直すという、言わば

「学び方」を身に付けていると感じました。そのような生徒は、大学でも豊かな学びを経験しているでしょう。

山本 読解力はもちろん、入試では、規定の文字数内で論理的に解答することも求められます。もしかすると、理科や数学の入試問題を題材にすれば、生徒に読解力や論理的な表現力の大切さをより身近にイメージさせられるかもしれません。国語の授業



**「なぜ、学ぶのかを1年次に
しっかりと考えさせることが、
3年間の学習の基盤となる」** 堀越

で育もうとする読解力、表現力は、どの教科・科目の入試問題を解く上でも必要だということを、私たち国語の教師はもっと強く意識してもよいでしょう。

**何のために学ぶのかを
生徒に強く問い掛ける**

日山 先ほど、理科について「文系志望の生徒に、理科が将来必要であること」を意識して伝えたというお話がありました。グローバル化や情報化によって社会が大きく変化しているからこそ、幅広く学び続けることが必要であることを、全ての生徒に理解させることがますます重要になっていくように感じます。

岩佐 多様化し、複雑化し続ける社会を生きるためには、知識だけでなく、「学び方」を身に付けることが



**「生徒と教師が一緒に考える
探究型の学習活動も取り入れながら、
基礎学力の大切さを伝えたい」** 榊原

大切です。そして、その土台として、「なぜ、学ぶのか」という問いに対し、自分なりの答えを持つことが求められます。私自身、ここ数年は生徒に「君たちは社会に貢献するために学んでいるんだ」とはつきりと語り掛けることが増えてきました。

山本 都市部では、小学生の時から塾に行くのが当たり前で、他人よりも高い点数を取ることに喜びを感じ、それを最も重視して勉強をしている生徒は少なくありません。実際、そうした学習観・進路観のままでも大学入試で成果を収めることは可能

ですが、大学入学後、やりたいことが見つからず、大学生生活に適応できない学生も現実によく存在します。新課程で求められていること、そして今進んでいる大学入試改革は、明らかに「なぜ、学ぶのか」という問いに答えられる生徒を育てようという社会の意思表示だと思えます。

日山 学習観・進路観の醸成という意味では、導入期の指導がより一層重要になりそうです。

堀越 本校でも、特に1年次の「社会に有為な人材」について生徒に考えさせる指導に力を入れています。HRなどで「何のために学ぶのか」をクラス全体で考えることは、各人の高校3年間の学習の基盤となるだけでなく、学習のモチベーションにおける二極化を防ぎ、結果的に学習集団の底上げにもつながります。

**生徒の主体性を重視した
授業展開に**

山本 高校入学後、出来るだけ早期に、生徒の「学びの価値観」を変える必要があると思います。本校では、今年度の新入生宿泊研修で、「何のために働くか」といったテーマでディスカッションを行い、将来社会に貢献できるようにするために、高校の授業や部活動、委員会活動などがあることを意識させるようにしました。入学直後から、将来を見据えて仲間と高め合おうという雰囲気をつくるのが、中学生から高校生へとシフトチェンジさせることにつながるのだと思います。

榊原 今、学習観・進路観の醸成という文脈で、「集団としての底上げ」「互いに高め合う集団づくり」という話が出ましたが、そうした指導のスタンスは、知識の量だけでなく、考え抜く力が重視される新課程における授業づくりでも重要です。

堀越 そう思います。私も、定義や定理・公式といった基本的な部分で

は、従来のチョーク&トークで指導し、習ったことを活用する場面では、集団の力を生かすために、ディスカッションなどを取り入れ、出来るだけ生徒同士で学び合う場を設けるようにしています。また、今の2年生からは、数学科は週末課題や小テストを廃止し、生徒個々が自分で課題を見つけ、取り組むように指導しています。「生徒に任せるより、自分たちが教えた方が早いし、確実だ」などと焦らず、集団として、そして個人として、生徒自身の学びが深まるのを我慢強く待つようにしています。

榊原 生徒同士の話し合いが少しでももたついていると、私たちはすぐにアドバイスしたくなりますからね。私も、「もう少し生徒たちに考えさせよう」と自分に言い聞かせながら授業をしています。本校は2013年度からSSHの指定を受



「生徒のモチベーションを維持し、改善につなげるためには評価の規準と基準が重要」 岩佐

けていますが、課題研究においても、生徒主体で進めていくことを重視し、教師が引っ張り過ぎないように気を付けています。

岩佐 SSHやSGHなどの課題研究を通して、生徒は、物理や化学の基本的な知識がなければ仮説検証の実験が出来ないことを実感します。高校の学習において、SSHやSGHなどで行われる探究学習は、教科学習と車の両輪の関係です。だからこそ、探究学習では、出来るだけ生徒の力だけで課題を設定し、その課題を解決する方法を考え抜く中で、教科学習の重要性も強く実感させたいと考えています。

榊原 その意味では、普段の授業においても、教師と生徒が一緒になって考えるような探究型の学習活動を適宜設定していくことも、基礎学力の大切さを実感させる上では重要になってくるのでしょうか。



「生徒主体の活動になるほど学習目標を明確に共有し、成果を振り返ることが不可欠」 山本

学校としての理念を掲げ新しい教育活動に挑戦する

日山 新課程、そしてこれからの大入学入試で一層重要になる「考える力」を育むため、「学びにおける生徒の主体性」を重視するという点で、先生方のお考えは共通しています。では、授業を展開する上で、どのようなことに留意すべきでしょうか。

堀越 例えば、生徒主体のディスカッションでは、議論が教師の想定した方向に進まないこともありまます。そんな時、強引にこちらの想定通りに議論を収束させたりせず、生徒が話し合った内容を生かして授業を展開することが大切です。そのためには、やはり教師には圧倒的な専門性、そして経験が必要です。

榊原 これまでの教科指導でも、例えば、問題演習で間違えた生徒の答えを生かしながら、授業を更に豊か

にすることが求められてきました。間違いを生かす指導が大切なのは、今も昔も変わらないでしょう。ただ、最近の生徒は早く正解を知りたがる傾向が強いので、「間違いが授業をより良いものにするのだから、ためらわずに積極的に発言してほしい」と生徒に訴えていくことが大切です。

堀越 授業で間違えた経験を強みとして発揮できるような問題を、具体的に提示することも必要ですね。

岩佐 生徒主体の学習では、適切な評価の規準・基準も重要です。レポートを書かせたり議論をさせたりした時に、何ををもって評価するのか、きちんと事前に生徒に説明しなければ、生徒の学習のモチベーションが高まらず、学習方策の改善にもつながりません。教師間で、評価の規準と基準の両方について共通理解をし、生徒に分かりやすく伝えることが重要でしょう。

生徒主体の学習についての アイデア



岩佐先生

本校では、昨年度の3年生から化学の実験で、実験の内容をまとめた実験プリントの配布を廃止し、代わりに個人でレポートを書かせることにしました。「なぜ、このような現象が生じたのか」をグループで考察し、レポートにまとめ、教師が添削します。生徒同士で議論したことを、自分たちの言葉で表現するためには、絶対的な基礎学力が必要です。時間が掛かる活動ですが、昨年度はポイントとなる3回の実験で行ったところ、深い考察による理解の深まり、関心・意欲の高まりが見られました。



山本先生

2年生で学習する夏目漱石の『こころ』のある場面を、グループごとに演じさせています。この時「先生」はどんな表情だったのか、きちんと読解が出来ていないと演じられませんし、自分たちが演じた場面を理解することで、作品全体に興味を持つようになります。中島敦の『山月記』では、「虎から人間に奇跡的な復活を遂げた李徴さんに聞く」というインタビュー番組をつくるという設定で、生徒たちにシナリオを考えてもらいました。また、評論では、「筆者の主張を、筆者に代わってプレゼンテーションする」という活動を行いました。いずれも、どうすれば教師が口を出さず、生徒が話し合いをせざるを得なくなるかという視点での取り組みです。そうした生徒主体の活動を通して、生徒の読解力が高まったと感じています。

山本 私は、話し合いなどのグループ活動では、いかに生徒に「やってみよう」と思わせられるかが鍵だと思います。「大変そうだけれど、やりがいも大きそうだ」と思わせる課題を、教師が生徒の状況に応じて用意することが求められます。グループ活動を取り入れても、目的の共有があいまいでは議論は活発化しませんが、活動が停滞したことに焦った

教師が、あれこれと余計な口出しをしてしまい、生徒一人ひとりの振り返りが深まらないことは珍しくありません。実際、私も若い頃にたくさん失敗を経験しました。
岩佐 アクティブ・ラーニングについては、今後現場でもその必要性の認識は更に深まっていくでしょう。その際、大事になるのは、「本校では、こういう人材を育成したい」という

学校としての理念であり、その理念を教師だけでなく、生徒とも共有することだと思います。理念が共有されれば、教師、生徒双方の意見を聞きながら、理念からぶれることなく、取り組みをブラッシュアップすることが出来ます。
山本 生徒主体の学習活動は、まだまだ多くの学校にとって新しい挑戦であるからこそ、その手法につい

て論じる土台として、「こういう人材を育てたい」という目標の言語化が必要なのだと思います。「国公立大に○人合格する」といった数値目標だけでなく、変化の激しい複雑な社会を生き抜くための力の育成という、より社会と一体化した目標を語り合うことが、今、高校教師に求められているのだと思います。

榊原 新課程、そして今進んでいる入試改革に目を向けることは、自校で育成する人材像を改めて校内で語り合い、それにふさわしい教育活動を推し進めていくことにつながります。その意味ではまさに今は、学校を改革するチャンスなのでしょう。

堀越 教育課程と入試環境の変化をしっかりと受け止めながら、5年後、10年後の社会でたくましく活躍できる人材を育てていきたいですね。

◎次ページからは、新課程入試に対応しつつ、本座談会で挙げられているような指導の観点を具体的に実践してきた3校の取り組みを紹介する。

「自調自考」の精神を根底に据え、主体的な学習者を育成

渋谷教育学園渋谷中学校高校は、開校以来、「自調自考」を教育目標の中心に据え、あらゆる教育活動の指針としてきた。校外研修をベースとした探究学習、生徒の視野を広げる校長講話、学びの集大成である「自調自考論文」などを通して、どのような環境変化にも対応できる骨太の学力を育成している。

教育の柱は「自調自考」「国際人」「倫理観」の育成

渋谷教育学園渋谷中学校高校は、開校以来、「自調自考」を教育目標に掲げ、あらゆる教育活動の羅針盤として大切にしている。同校が目指す「自調自考」の精神を備えた人物とは、自ら調べ、考えて正誤を判断し、責任ある行動を取ることが出来る人だ。そうした人材を育むために、学校生活のあらゆるところに「自調自考」の精神を浸透させている。中学・高校ともノーチャイムで、校則は一切ない。校外研修は、現地集合・現地

解散が原則だ。生徒は先輩や教師の姿を見ながら、人間として、社会人として何が大切なのかを学んでいく。

このように「自調自考」にこだわりの抜くのは、その姿勢こそが「真の学力」を育むために欠かせないと考えているからだ。自調自考論文担当の石井信博先生は次のように説明する。

「いくらテストや補習で外から知識を与えても、受け身の学習に終わるだけです。考える力や主体性が身に付けば、自分に何が必要なのかを自ら考えて学習に取り組むようになり、結果として、大学入試に必要な学力も身に付くと考えています」

日常のあらゆる活動が、思考力や判断力、主体性など、生涯にわたって学び続けるために必要な力や姿勢の育成につながるというのが「自調自考」の基本的な考えだ。この「自調自考」と併せて、「国際人の養成」「高い倫理観の育成」が同校の教育の3本柱となっている。

生徒主体の校外研修でプランニング力・探究力を磨く

「自調自考」の精神を最もよく反映している取り組みが、中学1年生、高校2年生で実施する校外研修だ。プランニング力の育成のみならず、

教科学習と連携させることで、探究的な力の育成も視野に入れている。

校外研修は、中学校では各学年とも春秋の年2回、高校は1・2年生の秋に各1回行われる。5年間で計8回実施し、段階的に力を伸ばしていく。訪問先は全て、教科学習と関連付けている。例えば、中学1年生の春の校外研修では鎌倉を訪れる。同時期に社会科で鎌倉時代の歴史を学んでおり、生徒は武士の都を実際に歩き、イメージを膨らませる。中学2年生では、古くから醤油産業が盛んな千葉県野田市のメーカーを訪問し、江戸時代の産業や物流について



高際伊都子 たかぎわ・いづこ
 渋谷教育学園渋谷高等学校副校長
 教職歴27年。開校時より現職。「自
 調自考の精神で一歩ずつ前へ進も
 う」



河口竜行 かわくち・たつゆき
 渋谷教育学園渋谷高等学校
 教職歴28年。同校に赴任して18年目。
 進路部副部長。第14期生学年主任。
 「迷ったらアクティブな方を選ぶ」



石井信博 いしい・のぶひろ
 渋谷教育学園渋谷高等学校
 教職歴16年。同校に赴任して10年目。
 自調自考論文担当。「学びたい気持ち
 を養えば、生徒は自ら勉強する」

渋谷教育学園渋谷中学校高校

- 1924（大正13）年開校の中央女学校が母体。96年に渋谷女子高校から共学の中高一貫校に移行。第2外国語講座の設置や海外研修など国際教育に力を入れている。帰国生が全生徒の2割を占め、海外の大学に進学する生徒も多い。スーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校。
- 設立 1996（平成8）年
- 形態 全日制／普通科／共学
- 生徒数 1学年約200人
- 2015年度入試合格実績（現浪計）
 国公立大は、北海道大、筑波大、東京大、東京工業大、一橋大、京都大などに106人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、明治大、早稲田大などに延べ508人が合格。
- URL <https://www.shibuya-shibuya-jh.ed.jp/>

の理解を深める。生徒は調べ学習のテーマから、どの施設で何を調べ、誰に何を聞くのか、スケジュール、利用する交通機関を含む、研修全ての計画を自分たちだけで立てる。高際伊都子副校長は、その狙いについて、「生徒は知識の習得だけに意識を向けがちですが、研修を通して、実際に見たり、話を聞いたりしなければ得られない知識があることを知るはず。教室という空間だけでは得られない、学びの広がりを感じることを期待しています」と説明する。

高校の校外研修では、国際人としての意識を高めつつ、より深いレベルの探究学習を行う。1年生では平和学習の一環として広島を訪れ、高校2年生では中国を訪問し、アジア文化の源流に触れることで5年間の校外研修の総仕上げとする。

**平和教育を通して
多様な価値観に触れる**

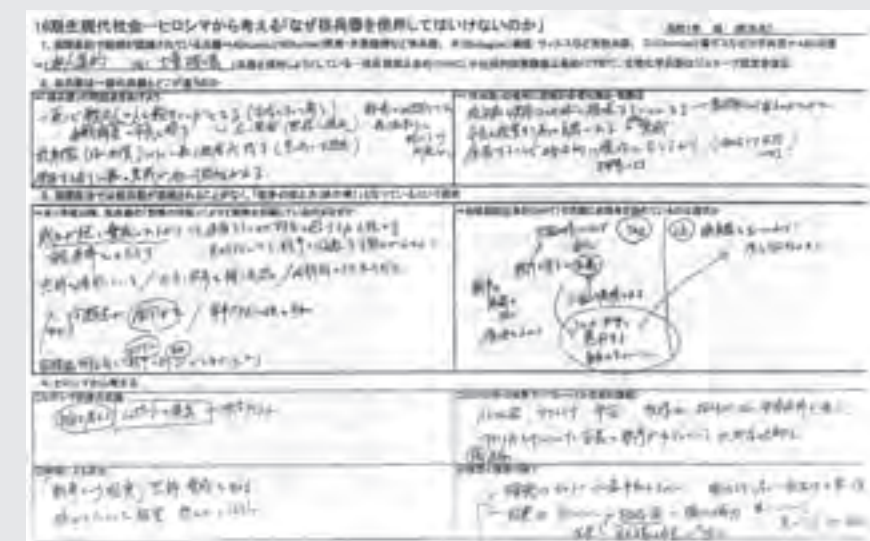
高校での校外研修のうち、探究的な要素が強いのが、スーパーグローバルハイスクール（SGH）の中心

的な活動である広島研修「Project Hiroshima」だ。国語科・社会科・英語科などによる教科横断型の授業で、平和への理解を深め、「人間と安全保障」をテーマとした探究活動につなげているのが特徴だ。

よって、教科学習が根底ではつながっていることを実感させ、より多面的・複眼的な視野の獲得を狙いとした。英語科の授業では、数人から成るチームで広島と平和をテーマとした

2014年度の活動を例に具体的にみていく。国語の授業では、『黒い雨』など原爆に関する作品、核兵器をテーマとしたアメリカ映画を題材に、戦争に対する日米の意識の違いについて考察した。更に、社会科の授業では、カントやウエーバーなど著名な思想家の政治観・平和観や、東京裁判の記録などを通して、平和について考えた（図1）。様々な角度から戦争や核問題を捉えることに

図1 広島研修の際の生徒のレポート



*学校資料をそのまま掲載

プレゼンテーションビデオを作製し、海外の協定校に送付して、高校生に評価してもらった。原爆の被害や戦後の復興など、戦争にかかわるものから産業や観光まで、生徒が自らテーマを決めた。英語は流暢だったか、言いたいことが伝わる内容か、訴えかけるものがあつたか、もつと聞きたいと思わせる内容だったか、といった点を評価の対象としてもらった。

同校の生徒はおおむね核兵器に否定的な考えを持っていたが、アメリカの協定校には、戦争の早期終結のためにはやむを得なかったと考える生徒もいた。海外との交流を通じて、育つた国が違えばものの見方や考え方も変わるといふ、当たり前ではあるが見落としがちな、物事の二面性に気付かされる生徒は多い。ある生徒は、「戦争は被害を受けた側は覚えているが、苦痛を与えた側は覚えていない。自分たちの正しさを主張するだけでなく、被害を受けた側の痛みについての想像力がないと、議論は出来ない」と述べた。

「そうした学びは、教師がいくら教科書を使って教えても、生徒に実感させることは容易ではありません。

体験からしか得られない学びがあるからこそ、私たちは多様な機会を生徒に提供すべきなのです。生徒は体験を通して、もつとうまく伝えたいという思いも強くします。教科学習の必要性を実感し、英語はもちろん、背景知識となる歴史や文化についてもつと知りたいという意欲も高めていくのです」(高際副校長)

生徒と社会をつなぐ 年6回の「校長講話」

同校では、学んだ知識を、自分の人生や社会にどのように生かしていくのかを考える機会も大切に行っている。田村哲夫校長が前身の渋谷女子高校時代から40年以上続けている「校長講話」は、生徒が人生や社会について考え、視野を広げるための取り組みだ(図2)。中学1年生、高校3年生まで年6回、計36回を正規の「授業」として組み込んでいる。

テーマは、中学1年生「人間関係」、中学2年生「自我のめざめ」、中学3年生「新たな出発(創造力)」、高校1年生「自己の社会化」、高校2年生「自由とは」、高校3年生「自分探しの旅立ち」だ。授業は45分。「学びと

図2 「校長講話」高校1年生の内容

年間テーマ「自己の社会化」

学期	内容
1学期	① 高校生活とは <ul style="list-style-type: none"> 国際羅針盤—日本の明日を考える 「高校時代に心がけて欲しいこと」朝倉紘治 『風姿花伝』世阿彌(ぜあみ) 司法制度改革 自己同一性の確立度
	② 自己発見 <ul style="list-style-type: none"> 『アイデンティティ・ゲーム—存在証明の社会学』石川准 『本という不思議』長田弘 『誇り高き市民 ルソーになったジャン=ジャック』小林善彦
2学期	③ 自然と地球環境 <ul style="list-style-type: none"> 「熱帯地域と国際交流」小坂光男 サステイナビリティ学とは 『DNA』—機能と構造 サイエンス 温暖化の地球史
	④ 読書と自己発見 <ul style="list-style-type: none"> 『海図と航海日誌』より 子供の読書と大人の読書 池澤夏樹 『夜の風見鶏』阿刀田(あとうた)高(たかし) 『みみずくの散歩』五木寛之 『ゾウの時間ネズミの時間』本川達雄
3学期	⑤ 感動と学習 <ul style="list-style-type: none"> 論理と情緒・教養立国ニッポン 藤原正彦 『「超」勉強法』より 勉強は意欲で進む 野口悠紀雄 現代に至る構造主義 ・ゲートに並ぶ賢者 オペロン説 動的平衡
	⑥ 学問への旅立ち <ul style="list-style-type: none"> 『アメリカン・マインドの終焉』より 書物 アラン・ブルーム 『夕陽妄語』加藤周一 学生の資質について 『啓発録』橋本左内(さない)

*学校資料を基に編集部で作成

は何か「国際理解」「友情」などのテーマを毎回設定し、古今東西の小説や伝記、哲学書、啓蒙書などを紹介しながら、生徒に人間の生き方や社会のあり方について考えさせていく。

「校長が答えを述べることはありませんし、全ての話が生徒に響くとは思っていません。様々な考え方を示すだけで、人生の方向性を決めるのは、生徒自身であるというのが講話のスタンスです。生徒が本気で人生と向き合い始める時期は、個人の資

質や発達段階によって異なります。多様な話題を提供し、1つでも心に響いて成長の糧になればよいと思っています」(高際副校長)

生徒が書いた校長講話の感想文は全て、担任、学年主任、副校長、校長が目を通す。それもあって、生徒は真剣に書くという。

感想文は担任にとって生徒把握のツールにもなっていると、進路部副部長の河口竜行先生は指摘する。

「生徒の感想を読んでいると、中学

3年生から高校1年生くらいで急に大人びていくのが分かります。一見受け身に思える生徒も、書いたものを読むと、実は自分の進路や生き方をしっかりと考えていることが少なくありません。生徒の自我の確立という意味で、校長講話の果たす役割は大きいと思います」

「独自科目で論理的思考力や表現力、課題解決能力を養う」

「自調自考」の実現のために、論理的思考力や表現力、課題発見・解決力の育成も重視している。そのため、独自科目を早くから整備し、指導方法を確立させたことも、今日の同校の躍進を支える原動力となっている。

論理的思考力・表現力の育成を図る学校設定科目は、中学校の「表現」(2単位)、高校の「文章表現」(1単位)である。

中学校での「表現」は、総合的な表現力の育成を図る。文章力はもちろん、ディスカッションやディベート、スピーチの能力、それらに付随して必要となる資料収集力やICT活用

力などを総合的に身に付けていく。

高校での「文章表現」は、文字通り文章に焦点を絞っている。元新聞記者の講師2人が各20人の少人数クラスを受け持ち、生徒は、時事問題や「家族」「友情」など様々なテーマについての文章を書く。

一方、課題発見・解決力を養うのが、「総合的な学習の時間」で実施している「自調自考論文」だ。生徒が自由に課題を設定し、解決を目指す探究学習であり、論文提出は卒業要件の1つになっている。

高校1年生1学期に論文作成上の基本的な知識・スキルを身に付けた上で、仮の研究テーマを決め、類似するテーマの生徒を15人程ずつ集め、2学期から約14のゼミに分かれて、研究テーマに関することを学ぶ。その後、担当教師の指導を受けながら最終的な論文テーマを決め、ゼミ内での中間発表を経て、高校2年生2学期までに1万2000字の論文を完成させる。論文テーマは、物理や社会学、心理学などの学究的なテーマからサブカルチャーまで幅広い。

環境変化に対応できる力の育成こそが大切

毎年、研究テーマの決定に時間が掛かる生徒もいるため、仮テーマを決める際、卒業生の有志がテーマ決定や研究の進め方についてアドバイスする場を設けている。

中間発表では、プレゼンテーションソフトなどを使い、1人5分程度で発表する。発表の中でゼミ生同士が意見を述べ合う過程も、論文の内容を濃くするために欠かせない。

「論文の完成度もさることながら、何より重要なのは研究の過程です。難しい英語の参考文献を読まなくてはいけなかった、文系のテーマに理系的な要素が必要になったなど、研究を深めれば深めるほど予想外の場面と向き合うことが多くなります。難しいテーマに挑戦して、思うような結果が得られない生徒もいます。1つのテーマを真剣に追究した人しか分からない苦労や喜びを感じるのですが、自調自考論文の最大の目的なのです」(石井先生)

論文を自身で外部のコンクールに出す生徒も多く、図書館振興財団主催「図書館を使った調べる学習コンクール」では、同校の生徒が2年連続で文部科学大臣賞を受賞した。

15年度入試で、同校は前年度の2倍以上に当たる33人の東京大合格者を輩出し、国公立大合格者は100人の大台を超えた。現行課程の移行時に、同校ではカリキュラムの大きな改編や補習の増加などを行わなかったが、河口先生は、「大切なのは、どのような環境変化が起きても対応できる力を、生徒に身に付けさせることだと考えます。生徒一人ひとりが自調自考の精神を身に付け、主体的に進路実現に向かっていくことが、結果的に進学実績にも結び付くのではないでしょう」と指摘する。

そうした同校においても、教師が指示を出してから生徒が動く場面は少なくない。今後は、アクティブ・ラーニングの質を高めるなど、あらゆる場面で「自調自考」を推し進め、生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナーの育成に努めていく考えだ。

英語の重点化、体系的な探究学習で

「質実剛健にして未来の俊傑」を目指す

1クラス減、英語力の低迷という課題を抱えながら、2015年度入試で実績を伸ばした新潟県立新発田高校。その背景には、学習意欲や進路意識を高める初期指導、「スロースタート」を合言葉にした英語の基礎力向上、そして、低学年時から体系的に行う探究学習があった。学力向上がもたらす自信、体験から生まれる確固とした進路観は、生徒にどのような好影響をもたらしたのか。

学年のスタートに当たり 学年団で課題と目標を共有

新潟県立新発田高校は県を代表する進学校の1つだ。例年約150人が国公立大に合格するが、前年度に比べて生徒が1クラス分減った2015年度も150人が国公立大に合格。国公立大進学率は前年度の35・9%から47・0%に上昇した。進路指導部長の小林等先生は、躍進の背景として、当該学年の「初期指導の徹底」「英語指導の強化」「探究学習」を挙げる。

「2008年度に公立高校の学区が

全県一区になってから、地元の成績上位層の一部が新潟市内の高校を目指すようになり、本校では学力低下、中でも英語の学力低下が恒常的な課題になっていました。今までと同じ指導では生徒を伸ばせないという共通認識を学年団全員が持つて指導に当たったことが、15年度入試の結果につながったのだと思います」

「初期指導の徹底」「英語指導の強化」「探究学習」の3つの施策を軸に、同学年の取り組みを見ていきたい。

14年度卒業生が入学した12年度、学年団発足に当たって行ったのは、課題と目標の共有だ。12年1月、次

年度の1学年団が集まり、直近4年間の国公立大合格者数、進学率などのデータを確認し、課題を洗い出した。そして、「国公立大合格率50%以上」「難関大進学者数15人以上」「旧帝大への複数合格」といった学年目標を決め、学習や進路への早期意識付け、生活習慣の確立、学習と部活動との両立、「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)の工夫といった指導方針を打ち出した。そうして課題と目標を共有した上で、3年間を見通した教科指導、進路行事、総合学習などの指導計画を立てた。進路指導部の平野深雪先生はこう語る。

「生徒の入学前にここまで詳細にデータを分析・共有した学年団は初めてでした。本校で3年間持ち上がりを経験した先生が、学年団に複数いたから出来たことだろうと思います。1回目目の経験を基に課題を整理したことが、学年団の早めの始動につながったのではないのでしょうか」

初期指導で重視したのは、生徒の学習習慣の確立と、主体的な進路選択の重要性を浸透させることだった。入学時から週1回の「学年だより」に加え、「進路だより」を発行。「今の学習時間では足りない」「語句調べなどの予習をきちんとして授業に臨



新潟県立新発田高校副校長
柳沢幸也 やなぎさわ・ゆきや
 教職歴31年。同校に赴任して3年目。「本校の校是を学校一丸となって具現化する」



新潟県立新発田高校
小林等 こばやし・ひとし
 教職歴27年。同校に赴任して6年目。進路指導部長。「地道に頑張っていけば、いずれ良いことが起こる」



新潟県立新発田高校
平野深雪 ひらの・みゆき
 教職歴32年。同校に赴任して8年目。進路指導部長。「高校生活は生徒にとって通過点である」

新潟県立新発田高校

- ◎創立119年目を迎える伝統校。2013年度からスーパーサイエンスハイスクール(SH)の指定を受け、地域や大学と連携した体系的な探究学習を展開。部活動も活発で、男子テニス部や陸上部などがインターハイに出場。
- ◎設立 1896(明治29)年
- ◎形態 全日制/普通科・理数科/共学
- ◎生徒数 1学年約290人
- ◎2015年度入試合格実績(現役のみ)
 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京工業大、新潟大、大阪大、神戸大、新潟県立大などに150人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ356人が合格。
- ◎URL <http://www.shibata-h.nein.ed.jp/>

もう」などと、時に厳しく、時に励ましながら、学習習慣の早期確立を促した。4月2週目に行った新入生オリエンテーションでは、高校での学習の仕方を指導すると共に、卒業生の大学生に合格体験を語ってもらい、進路意識の醸成にも努めた。

教科指導は英語に重点化 「スロースタート」の船出

教科指導では、生徒たちの最大の弱点であった英語の強化を優先して行うことを学年団で決めた。12年度入学生は従来の8クラスから7クラスに減った最初の学年で、生徒の減少に伴い、成績下位層も減るのではないかと期待があった。しかし、ベネッセの1年生4月のスタディーサポートでは、成績下位層と同様に成績上位層も減っていることが分かり、GTZ(*)のS1がゼロだった。特に英語不振の影響で、A3は全体の12%にまで落ち込んでいた。そうした中、英語科は、生徒に英語学習の取り組み方の指導を丁寧に行うことから始め、「スロースタート」

にして「高1ギャップ」と呼ばれる移行期をスムーズにした。授業をゆとり進めながら、小テストや週末課題で中学校段階の内容を復習させ、1人も取りこぼさずに基礎・基本を定着させることをまず重視したのだ。例年、1年生の4月当初から大学入試に対応した教材や単語集を活用していたが、この学年では最初の中間考査が終わるまではそれらを活用しなかった。英語科の圓堂愛子先生は次のように振り返る。

基礎・基本の徹底が 全体の底上げにつながる

「当初は本当にこの指導内容で良いのかという不安でいっぱいでした。進学校の指導としてふさわしくないのではないかと、かえって入試に間に合わなくなるのではないかと迷いもありましたが、決めた以上は徹底してやり抜く覚悟で臨みました」
 単に進度を落とすのではなく、基礎・基本が身に付くまで徹底して手を掛けたのもこの学年の特徴だ。中学校段階の内容を含む教材を使い、単語テスト、例文暗記テストを毎時間、週末課題から出題する週末課題テストを、毎週実施。合格点に達しない

生徒には再テストを行い、課題未提出の生徒は提出してから部活動への参加を認めることとした。
 「課題の定着度を意識させるため、毎週月曜に週末課題テストを行い、した。課題にしっかり取り組んでいれば合格できる問題にしたので、やれば出来るという自信につながったと思います」(圓堂先生)
 全員合格を目指す小テストは成績下位層の底上げが目的だが、全体指導にも効果的だと、圓堂先生は言う。
 「生徒にしてみれば、再テストは避けたいし、部活動にも早く出たい。中位層の生徒は1回で合格したいと地道に取り組みます。上位層にとっては学習のリズムづくりに役立ち、結果的には全体に好循環が生まれました」
 成績上位層には、2年生から志望校に応じて個別の添削指導を行い、定期考査では思考力・表現力を問う自由英作文を課すなどして、英語力

*ベネッセのテストにおける共通の評価指標。「S1」～「D3」までの15段階がある。

を引き上げる指導を行った。

基礎・基本の徹底の効果は、スタディーサポートの結果にも表れた。1年生1回目の英語のGTZではB2が最も多かったが、2回目ではB1、3回目以降はA3で推移した。生徒の英語に対する自信が深まるに連れて、積極的に学習に取り組む生徒、長期休業中に洋書の読破に挑戦する生徒も現れた。丁寧にかかわる指導によって、主体的に学ぼうとする姿勢が育っていったのである。

英語の指導での成功は、他教科の指導にも波及した。

「国語や数学などの教師も、英語の指導を参考に小テストなどで基礎・基本の定着を意識するようになりました。生徒も英語でそのような指導に慣れていたので、すんなりと受け入れてくれました」（小林先生）

生徒の主体性を引き出し 地域のリーダー育成を目指す

12年度入学生の指導で、最大の挑戦だったのが総合学習だ。それまでの総合学習は、夏休み前に5日間連続で大学教授の模擬講義を聞き、感想を書くという活動だった。生徒の

進路意識の醸成という面で効果はあったが、講演だけでは生徒は受身にがちだった。

「本校には中学校時代にリーダー的な存在だった生徒が多いはずですが、入学後にほとんど受け身になっていく印象がありました。それは、私たちが生徒を動かさずとしなかつたからだと思います。生徒には世界に羽ばたく人材になってほしいと思いますが、まずは新発田の発展を担う人材を育てることが本校の使命です。地域のリーダーを育てるためには、主体的に課題を発見・解決できる力や意欲を育てなければいけないと考えました」（平野先生）

総合学習の内容を構築する際、次の2点に留意した。1つは、体系的・継続的なプログラムにすること、もう1つは、生徒自身が活動し、考え、発表するというサイクルを組み込むことだ。そうして、3年間で体系的に探究学習に取り組む「未来の俊傑プラン」が始まった（図1）。

企業訪問を通して 生徒独自の課題を設定

1年生でのテーマは「地域とつな

図1 「未来の俊傑プラン」(2012年度入学生)

学年	テーマ	活動	目標と方策
1 学年	地域とつながる	「地域の俊傑」講演会	社会人による講演を通して仕事・地域社会について理解を深める。
		企業訪問	企業見学を通して仕事・地域の課題について理解を深める。
		地域の課題解決学習 地域の課題解決発表会	分野別のグループごとに地域が抱える課題を探索し、解決策を検討し、プレゼンテーションすることで、課題を明確化し、情報を収集・整理・分析し、他者と協同で発表する力を付ける。
		新聞切り抜きリレー	
2 学年	学問とつながる	学部・学科研究発表会	希望する学部・学科研究を通して、課題研究のテーマ設定につなげる。
		大学講義体験	大学教授による模擬講義を受講することで、分野別課題研究を深める。
		課題研究 課題研究発表会	グループごとに課題を探索し、解決策を検討し、プレゼンテーションすることで、情報を収集・整理・分析し、他者と協同で発表する力を付ける。
		課題研究小論文	グループ活動を基に、自分の意見をまとめることで、意見を客観的に構築し、論理的に表現する力を付ける。
		進路とつながる	志望理由書作成 新聞切り抜きリレー
3 学年	進路とつながる	総合講座	総合的な知力・学力の向上を目指す。
		小論文総合講座(新書ブックトーク・新聞課題解決学習)	意見を明確にし、論理的に表現することで、受験小論文の作成につなげる。
		インターンシップ(就職・公務員希望者)	新発田市主催のインターンシップ事業への参加を促す。
		新聞要約リレー	

*学校資料を基に編集部で作成

がる」だ。「農業環境」「医療」「金融」などの10分野から、生徒は希望分野を選択する。分野ごとに社会人講師から「働く意味」「地域の課題」といった話を聞いた後、地元企業を訪問し、業界や行政を取り巻く課題について説明を受ける。その上で、小グループに分かれて、それぞれの分野における地域の課題とその解決方法を模

索する。研究成果をグループごとに発表した後、各分野から代表の1グループによる全体発表会を行う。企業訪問では、研究分野に直接つながる課題を出されるとは限らない。企業担当者が提示した課題の中から、生徒がそれぞれ関心のある分野に引き付けて課題を捉え直し、その課題の解決策を見いだしていく。「訪問先

で同じ話を聞いているにもかかわらず、課題の捉え方は生徒によって異なります。発表を聞く生徒たちも、同じ課題でも様々な捉え方と切り口があるのだと、視野を広げていました」と平野先生は語る。

2年生では「学問とつながる」をテーマに、本格的な探究学習に取り組む。学部・学科研究を行い、関心のある学問に関する大まかな知識を身に付けた上で、大学教授の模擬講義を受ける。講義は学問分野別に10講座設けられ、生徒は希望する講座を受けた後、講座の中で小グループをつくり、それぞれ研究テーマを決めて探究学習をし、1年生の時と同様に、12月に分野別発表会と全体発表会を行う。その後、グループ活動を基に個人論文を作成し、自分の意見を論理的に表現する力の育成を図るところが、2年生の活動の特徴だ。

となつている。

3年生では「進路とつながる」をテーマに、ブックトークや新聞を活用した課題解決学習などを行い、受験に必要な論理的思考力向上を図る。

探究学習を通じての体験が主体的な進路意識を育む

探究学習は、生徒の進路選択に大きな影響を及ぼしている。「2年生で取り組んだ国際問題をもっと深めた」「県庁を訪問して、国際交流に携わりたいという気持ち強くした」など、探究学習の体験を踏まえて進路を選択する生徒が増えた。更に、「地域貢献」を自分の進路に関連付けて口にする生徒も目立つ。地域に根付いた探究学習がもたらした一定の成果といえよう。

体験を通して進路を見いだした生徒は最後まで諦めずに入試に向かう力も身に付けると、平野先生は言う。

「学力があっても志望が定まっていない生徒は、少し行き詰まると『志望を変えたい』『AO入試を受けたい』というように、やすきに流れていき

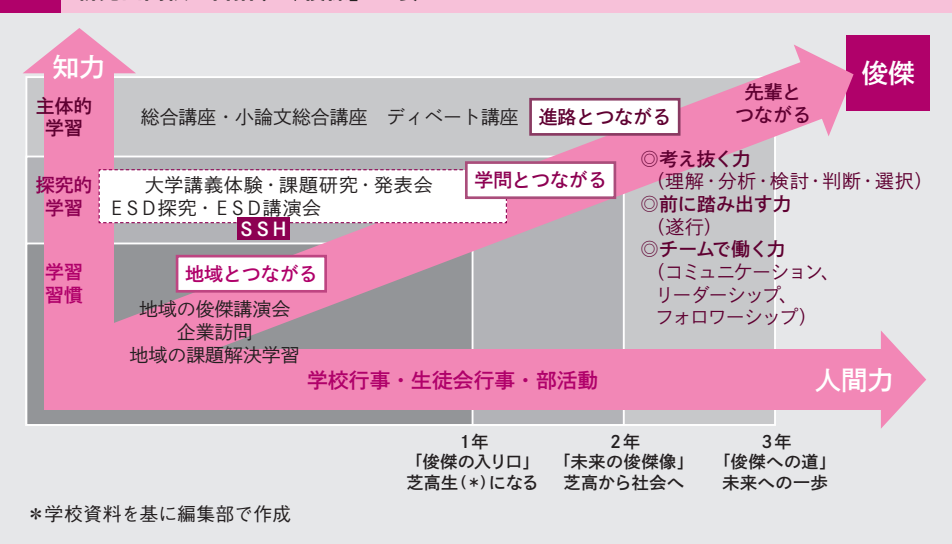
ます。目標が明確な生徒、ぶれない軸を持った生徒は、多少つらいことがあっても最後まで頑張り抜き、大学進学後も夢を追い続けています」

柳沢幸也副校長は、今の生徒に同校が掲げる「俊傑」の片鱗を見ている。

「本校の校是は『質実剛健にして未来の俊傑を目指す』です。それは、学力だけではなく、教科・進路学習、部活動、行事など、あらゆる教育活動を通して高められる総合的な人間力によって実現されると考えています(図2)。3年間の体系的な探究学習を通して、学びは受験のためだけではないという意識が浸透したことが、結果的に15年度入試の実績にもつながったのだと思います」

今後の課題は、1年生の探究学習の改善だ。現在、学校設定科目となり、総合学習と連携しながらより充

図2 新発田高校が目指す「俊傑」の姿



*「新発田」を略して「芝田」と書く慣例があり、その名残から同校は通称「芝高(しばこう)」と呼ばれる。

失敗や試行錯誤を経験させる 探究学習が「生きる力」を育む

富山県立富山中部高校では、生徒の主体性の低下、資格志向・安全志向といった生徒の気質の変化を課題と捉え、探究学習の充実や教科学習の課題の精選などに取り組んできた。探究学習を通して教科横断の学びを経験し、失敗や試行錯誤を繰り返すことで、生徒は教科学習の意欲も高め、受験勉強にも好影響をもたらしている。

生徒の主体性の低下、 資格志向・安全志向が課題

県内有数の伝統校である富山県立富山中部高校は、90年以上に及ぶ歴史の中で大きな節目を迎えている。2011年度、理数科を再編して、探究科学科（理数科学科、人文社会科学科の総称）を設置。14年度には、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けると共に、近代的な美術館を思わせる新校舎が竣工して新たなスタートを切った。

学校行事や部活動も活発で、進学実績も好調な同校だが、学校を取り

巻く状況は樂觀できないと、進路指導部長の中村謙作先生は強調する。

「県内の18歳人口は減少の一途をたどっており、この二十数年間で半数近くになりました。生徒の気質や能力も変化しています。文部科学省の『全国学力・学習状況調査』の結果を見ると、本県の小・中学生の学力は良好ですが、本校で指導していて、主体的に学習する生徒は以前より少なくなってきたと感じます。進路意識の面でも、将来への不安から資格志向・安全志向に偏る傾向にあります。本校の使命は、『鍛錬・自治・信愛』の精神に基づいて、自主性・

創造性を持った人材を育成することにあります。進学校として、地域の期待に応えるためにも、改革の必要性を感じました」

授業や学校行事、部活動など学校のあらゆる活動を通した全人教育は、同校の揺るぎない伝統である。探究科学科に再編する前の理数科でも探究学習を行い、授業も教科書の内容を超えた広がりを意識してきた。しかし、生徒の潜在力を引き出す余地がまだあることを、教師は感じていた。探究教育部長の仲井美喜子先生はこう指摘する。

「本校の生徒は基礎学力が高いの

で、教わった内容はどんどん吸収していきます。その一方で、教科書から離れて考えたり、教科横断的に考えたりする面では物足りなさもあります。主体的に学びを追究する力を育むために、探究科学科を改革の起爆剤にしたいと考えました」

幅広い教養を身に付ける 1年生の「基幹探究」

そうした課題意識の下、11年度、探究科学科はスタートした。あえて困難に立ち向かい、時代の先覚者になつてほしいという願いを込め、「きょうせんかく自彊先覚」を理念に掲げ、総合的な

富山県立富山中部高校

- 富山県立神通中学校を前身とする。2011年度、理数科を再編して探究科学科を設置。14年度にスーパーサイエンスハイスクール(SH)の指定を受け、全校を挙げて探究力・科学的思考力・自己発信力の育成に努めている。
- 設立 1920(大正9)年
- 形態 全日制／普通科・探究科学科(理数科学科、人文社会科学科の総称)／共学
- 生徒数 1学年約280人
- 2015年度入試合格実績(現浪計)
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、富山大、金沢大、京都大、大阪大などに256人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ535人が合格。
- URL <http://www.tyn.ed.jp/sc332/>



山口雄也 やまぐち たかひろ
富山県立富山中部高校
教職歴9年。同校に赴任して4年目。進路指導部長。「常に前向きに考えて行動し、挑戦心を持ち続ける」



仲井美喜子 なかい みきこ
富山県立富山中部高校
教職歴28年。同校に赴任して7年目。探究教育部長。「生徒の良いところを見つけ、褒める」



中村謙作 なかむら けんざく
富山県立富山中部高校
教職歴28年。同校に赴任して14年目。進路指導部長。「道義為の根」を常に頭に置き、自分への戒めとする」

図1 「基幹探究」「発展探究」の流れ

■1年次：基幹探究

4～6月 教科基礎

少人数授業(16人)で国語・地歴公民・数学・理科・英語の5教科について、それぞれ探究の基礎となる内容を学ぶ。

10～2月 少人数ゼミでの研究

教科基礎で興味・関心を持った教科のゼミに所属し、少人数ゼミ形式(8人程度)で課題研究に取り組む。ゼミごとにテーマを設定し、調査、実験、資料収集・分析を行う。

2月 研究報告会の開催

ゼミでの研究成果をまとめ、基幹探究報告会でポスターセッション形式の最終発表を行う。発表後、成果を研究レポート集にまとめ、今後、取り組むべき課題を考察する。

■2年次：発展探究

2～3月(1年次) 研究テーマの決定

各自が出した研究テーマに応じてゼミに所属し、春休みの課題としてテーマに関するレポートを作成。

4～2月 課題研究

生徒同士で話し合っってテーマを決め、グループまたは個人で研究を進める。

12月 3校合同発表会

富山県立富山高校・高岡高校との合同発表会を行い、学校を超えて研究成果を共有する。

1月下旬 校内での成果発表

課題研究の成果をまとめて校内で発表会を実施し、成果を課題研究集録としてまとめる。

*学校資料を基に編集部で作成

間力を備えた真のリーダーの育成を目標とした。学習の柱となるのは、1年生での「基幹探究」、2年生での「発展探究」だ(図1)。

1年生での「基幹探究」では、教科横断型の学びで、探究の基礎となる考え方や意欲を育む。「教科基礎」で探究学習を進める上で土台となる各教科の知識や教科横断的な発想力・思考力を養った後、国語・地歴公民・

数学・理科・英語のいずれかのゼミに所属してグループ研究を行い、ポスターセッション形式の発表を経て研究内容をレポートにまとめる。

特徴の1つは、文理を問わず幅広い学びを追究する点だ。「教科基礎」では、国語・地歴公民・数学・理科・英語の5教科について、教科書を離れた発展的・学際的な課題に取り組む。例えば、地歴公民ではグループ

活動で砂糖とコーヒーの歴史を学び、英語ではステイブ・ジョブズ氏やマララ・ユスフザイ氏などのスピーチを聴き、最後に自分でスピーチ原稿を書いて、発表した。

「教科基礎」で探究への意欲を喚起した後、9月(15年度は10月半ばを予定)から希望する教科のゼミに所属して「課題研究」に取り組む。ゼミは、生徒16人に対して、2人の教師が担当。8人ずつの少人数グループに分かれて活動する。探究科学科では、2年生から理数科学科と人文社会科学科の専門科目が入ってくるが、理系希望の生徒が国語や地歴公民のゼミを選ぶことも珍しくない。数学科の山口雄也先生は次のように語る。

「理数科学科で化学の研究に取り組みたいという生徒が、『1年生でしか出来ないから』と、『課題研究』では古典を選ぶこともありましたが、1年生の時に文系のゼミで研究したことが、2年生での『発展探究』で役立つという理数科学科の生徒もいます。文理を問わず幅広く学ぶ意義を、生

徒も理解しているのだと思います」

テーマ決定からグループ構成まで 生徒主体で進める「発展探究」

2年生の「発展探究」では、本格的に探究学習を行う。1年生2月に生徒各自が仮テーマを決め、理数科学科は数学・物理・化学・生物、人文社会科学科は国語・地歴公民・英語の、いずれかのゼミに所属する。春休みの課題として仮テーマに関するレポートを書き、2年生4月にゼミ生がレポートを持ち寄り、実際に取り組む研究テーマを決める(図2)。研究はグループまたは個人で進める。「自分はこれをやりたい」「このテーマは重なるから一緒にやろう」というように、生徒同士が話し合い、研究テーマを絞り込む。その結果、多くて6、7人、少ない場合は1人1テーマで、その後の研究を進めていく。数学のゼミでは、世界中の数学者が取り組んでいる難問に挑戦する生徒もいる。山口先生はこう話す。

「研究結果を出すことも重要ですが、テーマについて真剣に考えるプロセスそのものが大切だと考えています。調べた知識を吸収するだけで

図2 「発展探究」での研究テーマ例 (2014年度)

○国語	「本歌取り研究」
○地歴公民	「現代ウクライナ情勢をみる」「列強が作る小国の思想」 「『あいの風とやま鉄道』利用促進の可能性を探る」
○英語	「Cool Japan Strategies」 「The Secret of "I Have a Dream Speech"」
○数学	「身近な確率」「素数判定」「ルービックキューブ論」
○物理	「酸化物高温超伝導体の物性の測定」「ホバークラフトの機体の構造」
○化学	「高性能Mg空気電池の開発」 「人工エイクラ(アルギン酸カプセル)の性質」
○生物	「DNAによるアルコールバッチテストの検証」「もやしの成長について」

*学校資料を基に編集部で作成

はなく、答えを導き出すために何を調べ、どのような理論を用いたのか。結果的に失敗したとしても、自分で考え工夫するプロセスを通して、生徒は学問の広がりや奥深さを知り、それが学びの意欲につながるのです」

国語のゼミでは『源氏物語』の研究に取り組んだ生徒が、発表後、「装束の色や素材などについて化学的にアプローチする方法もあった」と感想を漏らした。研究を深めれば深め

るほど、内容の至らなさや発展の可能性が見えてくるのだ。

教科書の内容が全てではない その気付きが思考力を高める

探究学習を進めるうちに、生徒の教科学習に取り組む姿勢も変わっていくと、仲井先生は指摘する。

「2年間の探究学習を通して、生徒は、教科書に書いてあることや教師から言われたことを吸収するだけでなく、『なぜ、そうなるのか』といったところまで深く考えるようになります。教科書に書いてある内容が全てではないと体験的に知ること、より高いレベルの思考力が鍛えられていくのだと思います」

中村先生は、「探究学習での失敗や試行錯誤の経験は、大学入試を乗り越える力にもなっている」と述べる。「難しい入試問題になればなるほど、答えを導くまでに多くの試行錯誤が必要になります。計算したり図を書いたり、様々な方法を試しながら考え抜く。それは、失敗の連続であり、いわば人生の縮図のようなものです。探究学習で失敗や無駄をたくさん経験しておくことは、大学入

試に必要な思考力や粘り強さなどを鍛えるだけでなく、人生を切り開いていく上でも大きな力になるのです」(中村先生)

研究テーマが決まると、それぞれに研究を進め、9月に校内で成果を発表(15年度は1月の予定)、12月には富山県立富山高校・富山県立高岡高校との3校合同発表会を行い、学校を超えて研究成果を共有する。

生徒にとって最も大きな刺激となるのが、3校合同発表会だ。ゼミごとにポスターセッション形式で行う発表と、各校代表者による全体発表がある。全体発表では、知識の幅広さや質問の深さを競い合う様子が垣間見える一方、質の高い他校の発表に刺激を受け、「自分たちもこういう研究がしたい」と感じる生徒もいる。

学校を超えた刺激だけでなく、同校の普通科の生徒が探究科学科の生徒から受ける刺激も小さくない。

「部活動や学校行事、SSHの大学実習・海外研修など、授業以外の活動は全て、普通科と探究科学科が一緒に行います。探究科学科で培った学びへの姿勢や考え方が、普通科の生徒にも良い影響を与えており、逆

に普通科の生徒は探究科学科の生徒に負けたくないという気持ちを持つようになっていきます。今後は、生徒同士が高め合う取り組みを意図的にを行い、相乗効果を高めていきたいと考えています」(中村先生)

全教科で課題の精選を行い 自主学習の精神を浸透

生徒の主體的な学びを後押しする動きは、教科学習全体にも広がっている。それを端的に示しているのが、14年度から全教科を挙げて取り組む、課題の精選だ。提出が必須の課題の量を半分に減らし、それ以上の家庭学習については、教師が提示する発展的な課題の中から生徒が自由に選択する、または生徒が自分で見つけてきた課題に取り組ませる形にした。「ここ数年、生徒は教師が指示しなければ家庭学習をしないため、教師は不安になり、どんどん課題を与えてしまうという傾向にありました。生徒は多すぎる課題を消化し切れず、とにかく提出しなければと解答を見て、答えをただ写すだけの作業になっ

てしまう。提出することが目的となつてしまい、学力が付かないという状況でした。そうした悪循環から脱却し、自主学習の精神を浸透させるために、思い切って課題の精選に踏み切りました」と中村先生は説明する。

例えば、数学では、基礎・標準・発展に該当する3、4種類の課題を提示し、その中から生徒自身に取り組む課題を選ばせている。英語でも、標準・発展、難関大志望者向けなど、習熟度に応じた課題を提示している。

課題の適切な選択や自主学習の方法など、家庭学習に対する生徒の不安や疑問には、日々の面談で応える。同校は以前から個人面談を重視しており、担任は生徒1人当たり最低でも年6回、1回30分〜1時間の面談を行っている。生徒と直接話すことで、生徒の生活実態や学習・進路への思いを把握し、他教科と連携を取りながら支援しているのだ。

故郷愛を持った国際人の育成が 地方公立進学校の使命

課題の精選については、教科担当

や学年担当の間で何度も議論したという。少ない課題で実績を上げていく他県の実情なども示しながら、育てるべき生徒像、富山中部高校の未来などについて教師が語り合い、精選の方向で意見の一致をみた。

「ある時、近隣の小・中学校の夏休みの課題一覧を見て、本校の夏休みの課題と設定の形式が同じだと知り、衝撃を受けました。本校や他の進学校の卒業生が教師になり、小・中学校で同じ指導をする。その結果、高校の学習スタイルが義務教育段階に影響を及ぼすケースもあるわけです。課題依存型の教育から脱却するためには、何年もの時間が必要になりますが、本県の教育を牽引する高校の1つとして、本校が率先して取り組むべき課題だと考えています」(中村先生)

自主学習の精神は徐々に生徒の間に浸透しており、教師が提示した課題の他、自分で選んだ問題集や過去問に取り組む生徒も現れ始めている。生徒へのアンケートによると、7割の生徒が「必須課題の量は適切であ

る」と回答した。一方、「自主学習を十分進められた、自分なりに進められた」という生徒は4割にとどまっており、その割合をいかに大きくしていくかが、今後の課題だ。引き続き授業や面談などを通して、陰に陽に自主学習の大切さを訴えていくという。

公立進学校としてのアイデンティティーを大切に、自律的な学習者の育成を目指す富山中部高校。今後は、更に故郷愛を持った国際人の育成を模索していきたいと中村先生は抱負を述べる。

「本校の生徒の中にも、将来、世界を舞台に国際的なリーダーとして活躍する者や、グローバルな視点を持つて地域社会の活性化を担う者がいると思います。根なし草のようにならることなく、自分が生まれ育ったふるさとに愛情や誇りを持ち、たくましく未来を切り開いていってほしい。そうした人材を育てることが、地方公立進学校の使命であり、21世紀の富山中部高校のあるべき姿だと考えています」

ハートを
こがせ!

Vol.02

福井県立藤島高校

かるた同好会

才能が問われる

勝負の世界で

「自分の目標」に挑む



音になる前の音を 聞き取る集中力が必要

元部長の鈴木さん、五十嵐さん、西野さんは共に競技かるたの経験者で、同じ中学校出身。「憧れの藤島高校で、一緒にかかるたを続けられたらきつと楽しいはず」（鈴木さん）という思いで、練習をスタートさせた。

「最初は、3人で試合に出られるだけで十分でした。でも、後輩が入ってくると、もっと楽しくなりました。後輩とおしゃべりをしたり、修学旅行のお土産を渡したり、そのようなことで更に高校生活が充実していったことが、とてもうれしかったです」（鈴木さん）

男女合わせて7人の部員は、学年・性別を問わずとても仲が良い。だが、練習が始まると表情は一変する。いち早く札を奪うために、詠み上げられる上の句に耳を澄ますその瞬間、部員たちは「全

ての音が消える時」と表現する。

「全国レベルの選手の中には、詠み上げる前の詠み手の息の吸い方で、最初に発する音が『あ』なのか『か』なのかを区別できる人がいます。音になる前の音を聞き取れることを、私たちは『感じが良い』と言っています」（西野さん）

コンマ何秒かで音を聞き取り、素早く札を取る競技かるたでは、「練習も大切だが、才能も重要」と部員たちは説明する。競技かるたに熱中するほど、「自分の限界」を感じ、苦悩することもあるからこそ、自分なりの目標が重要だ。

「高校から競技かるたを始めた私は、先輩たちのレベルには高校3年間では追い付けないかもしれない。でも、3枚しか取れなかった札が、5枚取れるようになったら、同じ負けでもやはりうれしいです。だから、自分の目標をしっかりと持って、楽しみながら上達したいと思っています」（服部さん）

教師の
思い

集中力と

粘りの精神力で

人生を切り開いてほしい



福井県立藤島高校
武川英雄

たけかわ ひでお
教職歴31年。同校に赴任して8年目。
生徒指導部長。

驚くほどの生徒の 集中力と体力

競技かるたの1試合の時間は1時間30分ほど。大会では食事や休憩の時間も十分に取れないまま、1日に5、6試合をこなすこともあります。私は普段は運動部の顧問を務めており、競技かるたに詳しいわけではありませんが、それでも、これだけの集中力と体力が求められる競技は少ないと思います。しかも、試合ごとに異なる50枚の札の並びを、15分という短い時間でゼロから覚え直さなければいけません。生徒たちの記憶力、集中力には、ただただ感心します。

競技かるたで培った力は 人生の勝負の時に役立つ

かるた同好会に所属している生徒は、学



個人競技のように思える競技かるた。だが、団体戦になると「仲間もがんばっている」という一体感が、一人ひとりの集中力を更に高めてくれると部員たちは言う。

「1年生の2人は経験者で強いのですが、新部長の僕が実力を上げないと駄目です。全国大会に出場できるかどうかは、自分の上達レベルに懸かっていると思います」(落井さん)

「同好会でも強い」は 藤島高校の誇り

競技かるたを通して身に付いた力として、部員たちは一番に「集中力」を挙げる。

「競技かるたで身に付いた集中力は勉強にも生きるし、他のスポーツをする時にも役立っています」(岡田さん)

「暗記力も付きました。部活動の吹奏楽で楽譜を

覚える時も、頭にすっと入ってきます。勉強も暗記ものは大好きです」(戸川さん)

同好会を復活させたメンバーの1人、五十嵐さんは「最後まで全力を尽くす気持ち」を挙げる。

「礼に始まり礼に終わる競技かるたでは、勝敗が明らかになったからといって、試合を途中で諦めるのは相手に失礼ですし、最後まで勝負を投げ出さなければ、いつも以上の力が出ることもあるのです」(五十嵐さん)

3年生3人が卒業しても、残ったメンバーの目標はもちろん全国大会出場、そして上位進出だ。「勉強を言い訳に自宅練習をサボることはもうしない」(服部さん)と、皆気持ちを引き締める。「同好会でも強い藤島高校」は、生徒たちの誇りになっている。

かるた同好会

2014年度部員

3年生

鈴木裕加里
すずき・ゆかり

3年生

五十嵐遥
いがらし・はるか

3年生

西野涼希
にしの・すずき

2年生

落井真史
おちい・まことみ

2年生

服部聖加
はっとり・せい加

1年生

岡田英介
おかだ・えいすけ

1年生

戸川琴貴
とがわ・じんき

※学年は2015年3月時点のものです

校の成績も優秀です。それは記憶力や集中力はもちろん、窮地に立たされても諦めず、何とかしようとする粘り、自分をコントロールして戦い続ける力を、競技かるたを通して身に付けているからでしょう。そうした力は将来、「ここだけは譲れない」という人生の勝負の場面においても、きつと生徒たちの力となってくれるはず。

福井県はかるた王国と呼ばれるほどの土地柄で、同好会の中にも幼少の頃からかるたに親しんできた生徒がいます。この先、同好会の生徒の中から、様々な形で地元のかかるた文化にかかわっていく人材が出てくることでしょう。高校時代に情熱を燃やした競技かるたで、郷土・福井の発展に貢献し、自分を輝かせることが出来るのは、とても素晴らしいことだと思います。

福井県立藤島高校

◎福井藩の藩校「明道館」を前身とする。2014(平成26)年度に「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」の3期目の指定と同時に、「科学技術人材育成枠」の指定を受け、グローバル社会をデザインする国際性豊かな「21世紀を担うリーダーの育成」に取り組む。

◎設立 1855(安政2)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約340人

◎2015年度入試合格実績(現浪計)

国立大は、東京大、京都大、大阪大、金沢大、福井大などに257人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ473人が合格。

◎URL <http://www.fujishima-h.ed.jp/>



◎「第一級の人物たれ」が合言葉。旧制・明治中学校として千代田区神田駿河台の明治大構内に開校。2008年、同区猿楽町から調布市に移転し、男女共学となる。直系付属校で卒業生の大半が明治大に進学するが、ここ数年は国公立大への進学も増えている。

設立	1912(明治45)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約260人(高校)
2015年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、旭川医科大、筑波大、東京大、東京外国語大、東京工業大、横浜国立大、首都大学東京に7人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、法政大、立教大、早稲田大などに延べ21人が合格。明治大には238人が進学。他に、防衛大学校に2人が進学。
住所	〒182-0033 東京都調布市富士見町4-23-25
電話	042-444-9100
Web Site	http://www.meiji.ac.jp/ko_chu/

東京都・私立

明治大学附属明治高校・中学校

基礎学力向上

学力向上の施策を投入 社会で活躍できる力を 育む付属校に

変革のステップ

背景

◎保護者も教師も生徒を伸び伸びと育てたいという意識が強いが、マイナスの側面として学力向上への取り組みは遅れがちだった

実践

◎数学・英語を中心とした基礎学力の向上、生徒全員との校長面談による視野の拡大、英語プレゼン大会による表現力向上を図る

成果

◎英語力が大幅に向上。明治大進学後、学部総代や学部長奨励賞を受ける卒業生が増加。国公立大進学者が増えるなど、進路実績も多彩に

「付属校だからこそ、しっかりと学習を」
移転・共学化を機に始まった改革

明治大学附属明治高校・中学校の改革は、移転・共学化した2008年に始まった。

「付属校だからこそ、しっかりと学習をさせて、大学に送り出すべきではないか。生徒は生き生きと高校生活を送り、潜在的な学力やプレゼンテーション能力も高い。それなのに、英語が出来ないばかりに、大学で持てる力を発揮できていない。生徒が大学で胸を張って活躍できるように、学力をしっかりと付けて送り出すのは高校の義務です」

2009年に就任した金子光男前校長は、そう言って教師を叱咤激励したという。それは、明治大教授を兼務する立場故の実感から出てきた言葉だった。

複数ある明治大の付属校の中でも、同校の卒業生はほとんどが明治大へ進学する。そうした環境にいて安穩としてしまえば、緊張感は簡単に失われてしまう。広報主任の齊藤信弘先生は次のように話す。

「のんびりした学習環境から抜け出せないままの生徒も少なからずいて、教師の側も、生徒全員に学力を確実に付ける指導を確立できずにいました。一方で、ほとんどが明治大に進学するという進路実績だけでは、評価されないような状況も生まれつつありました」

データ解析により 付属生の課題が明らかに

当時、明治大政治経済学部教授だった安藏伸治校長が、金子前校長からの依頼で同校の教員研修を行ったのは、それから間もなくのこと。安藏校長の専門分野は人口統計学であり、FD



安藏伸治 あんざう・しんじ
明治大学付属明治高校・中学校校長
教職歴29年。同校に赴任して2年目。明治大政治経済学部教授。「自分より優れた人間を1人でも多く育てるのが教師の務めとして指導に当たる」



吉田重幸 よしだ・しげゆき
明治大学付属明治高校・中学校
教職歴32年。同校に赴任して32年目。国際連携主任。「様々な面で生徒たちが伸びる『きっかけ』を1つでも多くつくりたい」



村松教子 むらまつ・のりこ
明治大学付属明治高校・中学校
教職歴19年。同校に赴任して10年目。中学校生徒指導主任。「知らないことや初めての体験をたくさんしてほしい。一歩踏み出す後押しをしたい」



齊藤信弘 さいとう・のぶひろ
明治大学付属明治高校・中学校
教職歴17年。同校に赴任して12年目。広報主任。「自分には出来ないことも、生徒は出来るようにするために、自分が出て来る指導を考える」



本橋宏之 もとはし・ひろゆき
明治大学付属明治高校・中学校
教職歴12年。同校に赴任して8年目。中学校教務主任。「為せば成る。諦めずに続けていけば、いつかはきっと良い結果に結び付く」

(*1)の一環として、政治経済学部の全学生の出身校、高校時代の成績、受験した入試の形態、GPA(*2)、取得資格、就職先や業種など、入学前から卒業後までの全てを追跡するデータを構築していた。そのデータを基に、付属校出身者の大学での状況について説明した。安藏校長は分析結果に驚いた。入試形態別で見ると、付属校推薦入試より学力面で低いのは、スポーツ推薦入試と他の付属校推薦入試だけだった。「付属校の中心である本校は、大学や社会でリーダーとして活躍できる人材を育成すべき」と、安藏校長は研修で教師に訴えた。

「基礎学力は大学の学習だけでなく、社会で活躍するために必要な力の土台となります。政治経済学部は文系ですが、就職先の多くは銀行や証券会社などであり、理系出身者と一緒に仕事をします。膨大なデータも扱うので数字に強いことが必須です。逆に、理系の学部でも研究職などに就けば高い英語力が必要になります。大学が求める力、社会で活躍するために必要とされる力について先生方に説明し、意識改革を促しました」(安藏校長)

推薦要件の改定、定期考査後の 補習の導入で基礎学力を向上

改革の軸は基礎学力の向上だ。特に、付属生が最も強化すべき教科と言われた英語に力を入

れた。英語の外部検定試験対策の講座を設けた。外部検定試験を校内で受験できるようにしたりするなど、環境を整備した上で、明治大への推薦基準に外部検定試験の級・スコアを規定し、到達できない生徒は推薦しないことにした。定期考査では、数学・英語で一定基準に達しなかった生徒に放課後補習を行った。各教科で約10人の生徒を指名し、教科書の復習やテスト問題の解き直しをさせた。補習終了まで部活動には参加できない。懲罰的に感じる生徒もいるが、なるべく重い雰囲気にならないように工夫していると、数学科担当の本橋宏之先生は言う。

「生徒が『分かった』という手応えを得て自信が付けば、次の定期考査への意欲も高まるはず。ゲーム的な要素を取り入れるなど飽きさせない工夫をして、生徒が『学力が付いた』と実感できるようにしています」

また、数学では計算力向上に力を入れた。同校では、教師の作問による「漢字検定」「計算検定」を、年5回の定期考査に合わせて実施している。1〜5級があり、漢字10分、計算20分。計算の内容は高校入試レベルだが、1・2級になると文章題になり、数学が得意な生徒でも1問に5分以上掛かる難問となる。合格率は2級で3割、1級は1割程度という。

数学では、試験前に検定の過去問題集を使って予習させ、基礎が身に付いていない生徒の個別指導を徹底したところ、模試でほぼ全員が全

*1 Faculty Development の略。教員相互の授業参観、授業方法についての研究会など、教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みの総称。
*2 Grade Point Average の略。履修科目の評点に単位数を加味して算出する成績評価値。個々の学生の到達水準を測る目安に用いることが出来る。

国平均を上回る結果となった。

「数学の底上げを図るには、土台となる計算力の強化が必要だと考えました。数学が苦手な生徒も計算力が付けば自信になります。計算は方法さえ分かれば、1人でも取り組めるので、家庭学習につながるというメリットもあります」(本橋先生)

「皆で助け合い一緒に成長していこう」 校長による全員面談で視野を広げる

進路指導も変化しつつある。国公立大であれば、明治大との併願を許可している。また、「大学4年間を含めた10年間で生徒を育てる」方針に従い、大学進学後の姿をイメージできるよう、高校と明治大との高大連携講座を開始。週1回、全10学部の大学教員が行う授業を受講し、生徒は自分たちの将来を模索する。

金子前校長時代に始まった生徒全員との校長面談も、生徒の視野を広げる上で大きな役割を果たしている。生徒数人と校長室で語り合うグループ面談で、14年度に赴任した安藏校長も引き続き実施している。話題は学校生活や学習状況、進路についてなど様々だ。中学1年生には学校生活のあるべき姿について語り、高校2年生にはしっかりと学習すれば明治大以外の道も開かれると説く。そして、学年を問わず強調しているのが、「競争はするな」だ。

「生徒に意識してほしいのは、1番を取ることではなく、皆で助け合い一緒に成長していくこと。生徒には、競争に勝つことよりも、将来どんな研究や仕事がしたいのかを考えてほしいと思っています。それこそが、6年間を通してじっくり学べる付属校の良さです。5教科の基礎学力をバランスよく身に付ければ、将来の可能性が広がっていくことを知ってほしいと思います」(安藏校長)

英語のプレゼンテーションで 文章力・表現力の向上を図る

同校では、論理的な文章力・表現力の育成にも力を入れる。「英語スピーチ・コンテスト」は中学3年生と高校1年生が英語のスピーチを3〜5分以内、「イングリッシュ・プレゼンテーション」は高校2・3年生がプレゼンテーションソフトを用いて、英語で5〜6分で発表するもので、「創立100周年教育振興プログラム」の1つとして始まった。文章力・表現力の育成に、探究学習の要素が加わっている。国際連携主任の吉田重幸先生はその背景をこう語る。

「明治大から、論理的な文章力を鍛えてほしいという要望を繰り返し受けていました。そこで、まずは自分でしっかりと考え、相手に伝わる文章を書き、発表する力を伸ばそうと考えました」



写真「イングリッシュ・プレゼンテーション」の様子。英語とスライドを駆使しながら発表する。優勝した生徒は、「これまでにないほど図書館に通い、英語の文献も調べた。スライド資料を作る過程で、1つの物事にはいろいろな見方や側面があることが分かったのが、一番の収穫でした」と語った。

いずれの大会も、生徒が自らテーマを決め、調べ学習をし、個別に教師のアドバイスを受けながら、日本語でアウトラインを作成した後、英語の原稿を作成する。「英語スピーチ・コンテスト」は6月に準備を始めて1月に開催、「イングリッシュ・プレゼンテーション」は前年度の3学期に準備を始め、6月に開催する。大会までに審査が3回ある。1次審査では、英語科教師が生徒全員の原稿を見て、各学年30人を選抜。2次審査で他学年の英語科教師が原稿を見て更に20人に絞り、3次審査のプレゼンテーションで、10人のファイナリストを選ぶ。そして、個別指導を経て、全校生徒の前で発表する。ファイナリスト10人には約2週間の海外研修が贈られる。「イングリッシュ・プレゼンテーション」は、スライドを用いて発表するため、より論理性が求められる。春休みにテーマ決定に関する質問

会を行う他、地歴公民、理科、英語の教師と司書教諭らが、「ここは詳しく調べた方がよい」「ここは論旨がずれている」など、発表がより深まるよう支援する。原稿作成に充てる授業は2時間程度のため、生徒個々の意欲も試される。

プレゼンテーションの内容には年度ごとにテーマがある。14年度は「ライフ」で、「競走馬の安楽死」や「モデルの美しさ」などの切り口で発表された。発表後には、審査員を務めるネイティブの大学教員から英語で質問される。生徒ももちろん英語で答える。英語科の村松教子先生は昨年の大会を次のように振り返る。

「□□もりながらも、果敢に自分の考えを述べようとする生徒もいれば、緊張のあまり泣き出してしまふ生徒もいます。昨年のファイナリストの1人は、英語の学力不足が原因で留年した生徒でした。その後、一生懸命学習し、最後の10人に残った頑張りには驚かされました。自ら一步を踏み出せない生徒でも、教師が背中を押すことで、予想以上の力を発揮することがあります。生徒が伸びるタイミングを教師が見逃さず、しっかりと支援することが大切なのだ」と改めて感じました」

学力向上で大きく変わった 付属生への評価

改革の成果は、明治大に進学した卒業生の活

躍が示している。まず、英語力の向上だ。英語の外部検定試験の学年平均スコアは、09年度以降、毎年最高点を更新し続けている。更に、14年度には、大学在学中に公認会計士試験に合格した卒業生が7人出た。卒業生が大学卒業時の学部総代を務めたり、学部長奨励賞を受けたりすることも珍しくなくなった。また、他大学に進路の幅を広げた結果、東京大や旭川医科大学など国立大に合格する者も現れた。

今後の課題の1つは、海外に生徒の目を向けさせることだという。

「大学在学中に留学した卒業生と話をすると『高校時代に海外経験をしておけば人生が変わったかもしれない』と異口同音に言いま

す。海外で英語の必要性や自分の英語力の低さを痛感したという卒業生も少なくありません。早めに海外経験を積ませ、英語の学習意欲を高めることで、生徒の力が更に伸びると期待しています」（吉田先生）

そして、進路先の多様化も課題の1つだ。

「『しっかりと勉強させる付属校』というイメージは、受験生や保護者の間に浸透してきました。今後は、進路先を明治大に限定することなく、多様な進路の選択肢の中で、生徒が社会に出る10年後までを見据えた将来を生徒・保護者と一緒に考え、その実現を支援する学校づくりを一層進めていきたいと思えます」（安藏校長）

情熱 若手教師が語る、指導変革への

生徒がもっと伸びるよう 指導の工夫を継続する

中学校教務主任 本橋宏之

私は明治大の数学科出身ということもあり、生徒に何より数学を好きになってほしいと思っています。そこで、定期考査後の補習では、ゲーム的な要素を取り入れました。8枚の用紙を配り、黒板に書いた問題をその用紙に解かせ、正解するごとに用紙を回収し、8枚の用紙が全てなくなったら部活動に行ける。そうすることで、多少なりとも生徒に楽しく取り組んでほしいと考えました。また、数学力の底上げのため、計算検定を活用しています。それらの取り組みの結果、2014年度の学力推移調査第2回では、中学3年生の数学の平均偏差値は62.8と非常に高い値を記録し、理系生徒の国立大合格も増えています。

中学校教務主任の立場として、学校全体の指導力の底上げを図ることも、私の役割の1つです。前任校での経験を生かして導入した定期考査の振り返りシートは、中学校用のフォーマットを作成して、校内LANで全校に共有しています。高校でも、このフォーマットをアレンジして利用している先生は少なくありません。

今後は成績上位層をもっと伸ばして、国立大の志望者が希望をしっかりと実現できるように支援したいと考えています。そのためには、理系でも文系の科目、文系でも理系の科目の学力をしっかりと付けることが重要です。各教科の先生と連携を取りながら、学力の底上げを図る施策を打ち出していきたいと思えます。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2012年6月号指導変革の軌跡「静岡県立静岡南高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け



◎石川県立第二工業高校として開校。1994年、県内初の総合学科となり、95年に現校名に改称。2年次から人間科学、福祉・健康科学、生産技術、ビジネスの4系列に分かれる。地域貢献にも力を入れ、保育園や児童館でのミニコンサート、小・中学校での工作教室などを行っている。

設立

1962(昭和37)年

形態

全日制・単位制/総合学科/共学

生徒数

1学年約200人

2015年度入試合格実績(現役のみ)

公立大は、石川県立看護大に2人が合格。私立大は、金沢工業大、金沢星稜大などに延べ19人が合格。

住所

〒920-3114
石川県金沢市吉原町721番地

電話

076-258-1100

Web Site

<http://cms1.ishikawa-c.ed.jp/~hokurh/NC2/htdocs/>

石川県立
金沢北陵高校

基礎学力向上・表現力育成

「北陵+」^{プラス}「北陵α」^{アルファ}で
基礎学力の定着と
表現力の育成を図る

変革のステップ

背景

◎授業への集中力が欠く生徒や規律を守れない生徒が気になるように。生徒の意欲を引き出す指導を構築する機運が高まった

STEP 1

実践

◎中学校段階の学習内容を学び直す「北陵+」と、新聞記事を学習に取り入れて、考える力や表現力を身に付けさせる「北陵α」を実施

STEP 2

成果

◎意欲的に授業に向き合うようになり、生活態度が規律の取れたものになる。進路実現を意識して行動する生徒が増加

STEP 3

授業に身の入らない生徒たち
学校に漂う閉塞感を打破したい

石川県立金沢北陵高校は、1995年度に現校名となり、県内初の総合学科として再出発した。生徒の希望進路は就職から国公立大進学まで幅広いため、教師は生徒の適性や希望に応じた学習指導、進路指導を行う必要がある。更に、生徒自身にも主体的に将来を考え、希望進路を実現しようとする姿勢が求められた。

しかし、数年前から、生徒の学びに向かう姿勢や自ら進路を切り開く主体性を引き出すことが難しい状況に陥っていた。遅刻や、集会での集合・整列が遅いといったことが、気になるようになった。教師の中には、生徒がきちんと授業を理解しているという実感を持っていない者も少なくなかった。また、進路選択では、工業系の生徒が3年次になって美容師を目指し始めるなど、1・2年次で行ってきた進路指導の積み上げが、進路の実現に結び付かないということも珍しくなかった。3年前から進路指導主事を務める中盛邦昭先生は次のように振り返る。

「1年次からライブプランを立てるなどの進路指導を行っていましたが、生徒の進路意識を引き出し、高めることにはつながっていませんでした。生徒は自分に自信がなく、学校生活への目的意識も希薄で、教師も指導に迷う状態が続いていました」

10分間の朝学習「北陵+」で 中学校段階の学習内容を学び直し

生徒の学びに向かう姿勢を改善するために、進路指導課が中心となって2011年度に始めたのが、基礎学力向上のための学び直しの時間「北陵+」だ。

「授業中の生徒の様子を見ると、中学校段階の学習内容が身に付いていないために、授業に付いていけないことが分かりました。中学校の学習内容は、高校での学習の基礎となるだけでなく、社会に出た後に、自ら学んでいくための土台となります。まずは、中学校の学習内容を定着させ、「勉強が分かる!」という、自信を付けさせよう」と考



石川県立金沢北陵高校
中盛邦昭 なかもり・くにあき
教職歴27年。同校に赴任して7年目。進路指導
主事。「生徒にいつも笑顔で接し、褒めて伸ばす」



石川県立金沢北陵高校
島洋介 はた・ようすけ
教職歴25年。同校に赴任して2年目。2学年主任
「どんな生徒にもある学びの欲求を、どうやって
引き出し、どう伸ばせばよいかを考える」



石川県立金沢北陵高校
別宗由美子 べっそう・ゆみこ
教職歴17年。同校に赴任して4年目。3学年主任
「常に周囲への感謝を忘れず、絶対に諦めない
気持ちで、目標に向かい努力する」

えました」（中盛先生）

「北陵+」では、朝学習の10分間を活用し、1・2年次は数学と英語の学び直しを行う。教材はベネッセの「マナトレ」(*)で、1年次は標準編、2年次は挑戦編に取り組み。各学年とも、9月まで1日おきに数学と英語に取り組み、10月からは漢字検定に向けた対策や、進学・就職に向けた問題集などの学習に移行する。

13年度の1年次からは、独自の「マナトレテスト」を導入。「マナトレ」の教材を参考に、数学・英語科の教師が各50点満点のテストを作成。9月までに2回、LHRで実施する。答えは担任が集め、学年会全員で採点する。この取り組みを提案した2学年主任の島洋介先生は言う。

「『頑張れ』と言っても、どう努力してよいか分からない生徒は多いです。時には『テスト』という明確な目標を設定し、強制力を持たせることも必要だと考えました。毎朝の取り組みでどれだけ力が付いているのか、生徒自身が実感できる機会にしています」

「マナトレテスト」の事前・事後指導も徹底して行う。テスト2週間前から、「マナトレ」付属の「おかわりプリント」を1日1枚、宿題として課す。そして、各教科20点以下の生徒には、テスト終了後、3日間、放課後のマナトレ補習を課した。補習の指導は、教科を問わず学年会の教師全員で行うのがポイントだという。

「『マナトレ』が使いやすいのは、教科の枠

を超えて指導が出来ることです。学年全体の取り組みとして教師一人ひとりに当事者意識を持ってほしいと考え、全教師で指導に当たることにしました。基礎・基本が定着していない生徒が多いということを、数学科や英語科以外の教師も実感する機会になりました」（中盛先生）

新聞コラムの感想を話題に 面談を行う「北陵a」

表現力・読解力の向上を目指す「北陵a」も始めた。年10回（15年度は8回の予定）、金曜の終礼前25分間で、新聞のコラムを読み、感想を書くという取り組みだ。教材は、進路指導課が選び、難しい用語には解説を併記する。14年度は、北陸新幹線開通や金沢市内の飲食店で起きた事件など、生徒に身近な話題を取り上げた。

「北陵a」の最大の特徴は、ただ書かせるだけでなく、生徒の感想を基に教師と面談を行う点だ。この「アルファ面談」は、7月、10月、1月の年3回（15年度は7・1月の2回の予定）実施する。面談は全教師が担当。生徒が、日頃接することのない教師と話が出来るように、毎回違う組み合わせで面談をする。14年度では、教師1人当たり約10人の生徒を担当した。

「就職試験や入試の面接をにらみ、初対面の人もコミュニケーションが取れる力を育

*ベネッセの教材の1つ。学習力を身に付ける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。

みたいと思っています。教師によって質問の内容や考え方も変わるので、生徒の表現力もより豊かになると考えました」（中盛先生）

教師は事前に担当する生徒の書いた3〜4回分の感想文を読み、面談では記事を読んでどう思ったのか、感想文でどこを工夫したのかといった質問をする。面談時間は約5分。教師は聞き役に徹し、生徒が考えを述べる時間を十分に確保する。1年次での最初の面談では口ごもる生徒も多いが、回を重ねるごとに記事の主張を踏まえて意見を表明できるようになる。また、敬語をきちんと使えるようになるなど、規律面においても格段に成長するという。

教師との「アルファ面談」で「コミュニケーション力」の向上を図る

「アルファ面談」をより効果的に行う工夫の1つが、「面談カード」(図)の活用だ。これは、教師のアドバイスや生徒の「聞く・話す・考える」意欲について、教師が記録するカルテの役割を果たす。生徒は、面談後にこのカードを見て、振り返りを行い、次の「北陵α」や面談に向けての対策を立てていく。

「面談カード」を通して、生

図 「北陵α」で使う「面談カード」



*学校資料をそのまま掲載

徒の成長を実感する教師も多い。3学年主任の別宗由美子先生は次のように語る。

「面談後に生徒と話すと、全く印象が変わっていることがあります。『面談カード』を読み、社会に出たらどのような力が求められるのか、自分には何が足りないのかを真剣に受け止め成長しているのだと思います。面談を重ねていくうちに、生徒が楽しみながら学んでいることを感じられました」

「アルファ面談」は、「北陵α」での学びを更に深める場にもなる。畠先生は、生徒が書いた感想に質問を書いて渡し、答えられそうなものを1つ選んで事前に調べさせ、面談で簡単な口頭試問を行っている。例えば、T P P（環太平洋戦略的経済連携協定）を選んだ生徒には、T P Pとは何か、次に何が起ると予想されるか、それによって世の中がどう変わるかといった質

問をし、「生きた知識」として定着させる。

「生徒は、予想以上にきちんと準備をしてから面談に臨んでいました。『生徒の力はこの程度だろう』と、教師が生徒の限界を決めつけるべきではないと改めて実感しました。知識が身に付き、生徒の視野が広がっていると手応えを感じています」（畠先生）

独自の「語彙プリント」で社会への視野を広げる

基礎学力の定着と表現力の向上に加え、生徒の視野を広げる取り組みにも力を入れる。

15年度、2年次の「北陵+」では、学校独自の「語彙プリント」を実施することとした。ベネッセ・朝日新聞社共催「語彙・読解力検定」を参考に、語彙力を育てる独自の学習プリントを学年会で作成している。この取り組みでは、「グローバル化」「パラリンピック」「ゆるキャラ」など、新聞やインターネットでよく目にする語句について学ぶ。説明文を読み、選択肢から正解だと思ふ語句を選び、答え合わせをする。そして、間違えた言葉の説明文を書き写す。

「言葉を知らなければ小論文や面接でつまずくのはもちろん、新聞やニュースも理解できません。まずは社会でよく用いられる言葉を理解することで、社会とつながる力を身に付けてほしいと考えました」（畠先生）

「語彙・読解力検定」挑戦に向けて、自主的に学習する生徒も増えた。進学希望の生徒にも、就職希望者に負けないよう、今後は積極的に受検を促していく予定だ。

また、15年度の2年次には、就職希望者を対象に、放課後の「就職補習」を実施予定だ。体育科、工業科、商業科などの教師が講師を務め、SPIなどの就職対策の他、新聞記事を基にディベートなどを行う。「インターネットのニュースに書いてあった」「こんな主張の書籍を読んだ」など、生徒と教師が意見を述べ合い、「答えない問い」について考えていく。

「たとえ世間話で終わつたとしても、友達や教師と一緒に社会情勢や社会問題について語り合う経験は、決して無駄にはなりません。新たな視点を得たり、コミュニケーション能力を高めたりすることで、就職試験でもアピールでき、社会で生き抜いていける力を身に付けられると期待しています」（畠先生）

生徒にもGTZを意識させ 更なる学力向上を目指す

ここ3年間の生徒の成長は著しい。時間を守るようになり、授業もきちんと顔を上げて聞くようになった。教師との接し方も、以前は友達口調だったのが、今では礼儀正しく、敬語も使えるようになった。

総合学科で求められる指導とは？

進学・就職の両面で 満足度の高い指導を目指す

2学年主任 畠 洋介

本校に赴任して感じたのは、生徒の自己肯定感の低さです。普段の雑談では、「こんなに面白いことが言えるのか」と驚くことがあるのに、自分のことを語らせたら、否定的な言葉しか出てきませんでした。自分に自信が持てないから、将来に対する希望も抱けない。そして、自分の考えを述べることにためらいを感じてしまう……。自己肯定感を高め、本来の彼らの良さを引き出すためにはどうすればよいのか、日々考えながら指導に取り組んでいます。

本校の生徒の希望進路は、就職から国公立大進学まで多様です。進学については、放課後補習など学力を伸ばす機会やノウハウがあり、偏差値など学力を測る指標もあります。一方で、就職については、それがありません。2年次で就職補習を始めようとしているのは、就職を目指す生徒に対しても、潜在能力を引き出す指導をしていかなければならないという思いがあったからです。

今後は、就職指導の精度を高めるために、就職試験の合否とGTZの相関を測るデータの収集・作成を検討しています。データが蓄積されれば、「A社ならBゾーン以上への到達が必要」など、大学入試の合否判定予測を行うように就職指導の精度も高まるはずだ。

就職も進学も学年全体で指導に取り組み、生徒一人ひとりの希望進路を実現することが、これからの総合学科にはますます必要になるのではないのでしょうか。

「進路を意識して行動する生徒が多くなりました。『北陵a』や教師との面談で視野を広げ、社会や大人を認識するようになり、自分の将来を真剣に考えるようになってきています」（別宗先生）

教師の意識も変わった。当初、教師全員参加が基本の「北陵+」「北陵a」に疑問を呈する声もあったが、生徒が変わっていくに連れて、教師全員が積極的に取り組むようになった。更に、新たな活動が提案されることもあるという。教師がベクトルをそろえて指導に当たることと、効果は更に高まると実感している。

今後の課題は一層の学力の向上だ。ベネッセの「実力診断テスト」を活用し、GTZ（*）

を目安にした指導に力を入れている。生徒全員がCゾーン以上への到達を目標に、ゾーン別の一覧表や過年度との比較などのデータを教師間で共有し、生徒にも意識させている。

10年後を見据えた「ビジョン委員会」も動き始めた。各分掌の主任で構成する組織で、教科学習や資格取得のための学び、進路指導、行事などあらゆる取り組みの見直しを進めている。

「少子化の中、金沢市内の学校だからと慢心しては、統廃合の対象になるかもしれない。行きたい学校・行かせたい学校と、地域から選ばれ続けるために、生徒の学力・進路を保証し、生徒・保護者の満足度を高める改革を推進していきます」（中盛先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2012年4月号指導変革の軌跡「宮城県黒川高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

2年生・夏休み前後

オープンキャンパス指導ツール

自校の指導ツールを他校の教師と共に検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、志望を掘り下げたり、進路意識を広げたりするための「オープンキャンパス指導ツール」について検討する。

検討会メンバー



群馬県立
太田高校
新井高広
あらい・たかひろ

教職歴24年。同校に赴任して7年目。3学年担任。進路指導部。数学科。「正しい道を選ぶのではなく、選んだ道を正しいものに出る生徒を育てたい」



愛知県立
東海商業高校
新美廣勝
にいみ・ひろかつ

教職歴23年。同校に赴任して1年目。3学年担任。生徒会部。商業科。「自分の自信と、母校への誇りを持った、社会に愛される生徒を育てたい」



大分県立
中津南高校
遠藤源治
えんどう・げんじ

教職歴14年。同校に赴任して3年目。2学年担任。進路指導部。理科。「為せば成る」の信条の下、夢に向かって挑戦し続けるタフな生徒を育てたい」

群馬県立太田高校・新井高広先生
オープンキャンパス前後に記入する・2年生「大学見学実施計画書・報告書」

ビフォー

実施計画書では、見学先までのアクセス、見学先として選んだ理由、見どころや確認したいところを書かせる。担任は、それぞれの生徒がどこの大学に見学に行く予定かをチェックする。

大学見学実施計画書
2年 組 番 氏名

①志望大学

第1	大学	学部	学科
第2	大学	学部	学科
第3	大学	学部	学科

②見学先

大学	学部	学科
所在地		
実施日	年 月 日	曜日
経路(鉄道路線など)		
行程		
自宅発	大学着	自宅着
同行者	無	有
保護者・友人(下に氏名と学籍番号を書く)		
氏名	()	氏名 ()
氏名	()	氏名 ()

③ 目的(選んだ理由や見どころ、確かめどころなど明記)

大学見学報告書
2年 組 番 氏名

① 見学先

大学	学部	学科
----	----	----

② 大学の印象(見たり聞いたりしたことから感じたこと)

③ 大学の特徴(訪問してわかったり、あとから調べて得た知識)

④ 大学見学の反省・感想・大学受験への決意など

報告書では、実際に行って感じた大学の印象、分かったこと、大学見学の反省と受験に向けた決意を書かせる。報告書は文理別に冊子化し、2年生が自由に閲覧できるようにしている。印象的な生徒のコメントを抜粋し、プリントにまとめ、次年度の2年生向けの資料としている。

狙いと機能

志望を深め、進路を語り合う
雰囲気クラスに醸成したい

群馬県立太田高校では、2年生に対して進路意識を高めることを目的に、オープンキャンパスへの「最低でも1校の参加」を促している。その前後で「大学見学実施計画書・報告書」(上図参照)の作成を生徒に課している。実施

計画書は各自記入して、7月中旬までに担任に提出する。報告書はLHRの時間に、志望大や志望学部の異なる生徒でグループを作り報告し合うことで、大学への視野が広がるよう活用している。

検討

「ここにしかないもの」を見つけるには
比較させることが欠かせない



新井 生徒には複数の大学に見学に行くよう
に指導していますが、

宿題のような感覚で臨み、本来の志望とは異なるにもかかわらず、**気楽**に行ける地元大のオープンキャンパス(以下、**OC**)で済ませてしまいう生徒もいます。部活動との兼ね合いで志望大のOCに、どうしても参加できないケースもありますが、「**大学はどこも同じだから、志望大までわざわざ足を運ぶまでもない**」「**インターネットで調べれば分かる**」と誤解している生徒もいるようです。



遠藤 本校もOC参加前後で生徒に指導して
いますが、事前指導で

は学部・学科調べに力を入れていま
す。**研究内容や取得可能な資格、卒業後の進路などを調べ、「実際に自分の目で確認しよう」と大学見学の目的を明確にすることが狙い**です。ただ、研究内容については、大学のホームページだけでは十分に理解できな



新美 大学のホーム
ページは、研究内容を
知る1つの情報源です

い生徒もいるので、改善の余地はあり
そうです。また、事後には、学年
全体で報告書の発表会を行います。

が、高校2年生にとっては難解な場
合もあります。本校では、短大や専
門学校のOCに参加する生徒も多い
のですが、事前学習では、大学のホ
ムページの中でも、**学生によるゼミ
紹介など、大学生の声を読んでおく
ように指導**しています。

遠藤 3年生の担任を経験して分
かったのは、**OCがきっかけで志望
大を決める生徒が多く、OCが生徒
にとっては非常に重要な機会である
ということ**です。半面、難関大に合
格できる潜在能力を持った生徒が、
他大のOCへ行ったことで、**比較す
ることなく狭い視野で志望大を決め
てしまうケース**もあります。受験ま
でまだ時間のある2年生の夏という
タイミングだからこそ、**興味・関心**

と学力に合った大学のOCに参加さ
せたいです。

新美 自分の志望を見極めるには、
複数の進路を比較することが欠かせ
ません。本学では、必ず3校は見学
するように指導し、見学先でもらっ
たパンフレットを学校に持ってこさ
せます。進学にしろ、就職にしろ、
生徒には強い志望理由が必要です。
そのためには、**複数の進路を比較し、
「ここにしかないもの」を見つけさ
せたい**ところです。

新井 事前学習で、大学はどこも同
じではないことを実感させ、大学見
学の狙いを明確に伝えたいですね。
そのためには、**複数の進路を比較す
ることを前提に指導**することが重要
だと改めて実感しました。

課題と解決策

- 1 「大学はどこも同じ」というわけではないこと
を実感できる事前学習を実施する
- 2 複数の進路を比較することが出来るOCの事
前・事後学習とする
- 3 OCで志望大を固める生徒が多いことを念頭
に置き、生徒の興味・関心と学力に合った大
学を見学するように勧める

学校プロフィール

群馬県立太田高校

◎ 全日制 / 普通科 / 男子校 / 1学年約
280人

◎ 2015年度入試合格実績(現浪計) / 国
公立大は、東京大、東北大、群馬大などに
166人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京
理科大、早稲田大などに延べ669人が合格。

愛知県立東海商業高校

◎ 全日制 / 総合ビジネス科・情報科(1年
次は両科共通のカリキュラム。2年次より分
かれる) / 共学 / 1学年約320人

◎ 2014年度進路実績(現役のみ) / 4年
制大進学30人、短大進学11人、専門学校進学
65人、就職169人。

大分県立中津南高校

◎ 全日制 / 普通科 / 共学 / 1学年約200
人

◎ 2015年度入試合格実績(現浪計) / 国
公立大は、大阪大、九州大、大分大などに
138人が合格。私立大は、慶應義塾大、早
稲田大、同志社大などに延べ249人が合格。

検討会で明らかになった課題を踏まえ
2年生「大学見学実施計画書・報告書」を改良!
次ページで紹介します。

アフター

大学別報告書 2年 組 番 氏名 _____

大学・学部・学科名 _____

テーマ	大学案内やホームページを調べて、魅力に感じるところ	教授や大学生に聞いてみたいこと	オープンキャンパスで実際に確認できたこと	テーマで更に知りたいことや、分からなくて困っていること
アドミッションポリシーや教育方針、育てたい人材像				
研究内容、学べること				
取得できる資格				
大学卒業後の進路				

OCの前に記入

OCの後に記入

オープンキャンパスで「驚いた!」「楽しかった!」シーン

オープンキャンパスで「予想と違った」「もっとこんな準備をしておけばよかった」などの反省

事前に見学先の大学で学べることを調べ、OCで確認し、報告書として完成させる。今回の検討会で先生方から出た「大学生や教授に質問させる」「アドミッションポリシーを意識した大学見学に」「予想と違ったことも書かせたい」といったアイデアも盛り込んだ。

大学別報告書 まとめシート

2年 組 番 氏名 _____

●大学別報告書を作成した大学

OC実施日	大学・学部・学科名	志望順位
月 日	大学 学部 学科	位
月 日	大学 学部 学科	位
月 日	大学 学部 学科	位

※第1志望大学の報告書を作成できなかった場合は、下に第1志望大を記入すること

[第1志望]

オープンキャンパスや事前・事後の大学調べを通して分かったこと、気付いたこと

研究内容や学べる内容で、一番重視したいこと、こだわり	今回見学したり調べたりした大学で、物足りなさや不足を感じていること
アドミッションポリシーや教育方針、育てたい人材像の中で、一番重視したいこと、こだわり	今回見学したり調べたりした大学で、物足りなさや不足を感じていること
学部卒業後の進路、取得できる資格、一番重視したいこと、こだわり	今回見学したり調べたりした大学で、物足りなさや不足を感じていること
オープンキャンパス参加による第1志望大への変化 <あった・なかった> ←当てはまる方に○をその理由	
第1志望大合格に向けて、高2後半から何をどのように頑張るか	

複数の大学・学部・学科を調べた上で、OCに参加して気付いたことや不足に感じたことをまとめるシート。大学についての理解を深め、自分の進路観にどんな変化が生じたかを内省させる。

改訂後の狙いと機能

異なる大学・学部を理解する機能と、進路観を内省する機能とに分ける

大学見学実施計画書と報告書の2種類に分けるスタイルから、「大学別報告書」と「まとめシート」から成るスタイルに変更した。大学別報告書は、従来の実施計画書と、事後に書く報告書の要素を受け継いでおり、1枚の用紙でOC参加前と後での自分の志望の変化を整理、比較することが出来る。複数のOCに参加した場合、その数だけ大学別報告書を作成し、1大学しかOCに参加できない場合

は、同じ大学の異なる学部・学科で報告書を作成し、それぞれの進路を比較する。大学別報告書は、生徒自身がOCの成果と今後の進路学習の課題を振り返るものであり、クラス全体で共有することも可能だ。

まとめシートには、複数の進路を比較して分かった自分の進路へのこだわりや今の時点での不安などを記入させ、担任との個人面談の材料とする。担任は、まとめシートの内容を参考に面談の順番や時間配分を決めることができ、更にまとめシートからクラス共通の課題が見つけられれば、LHRなどにおける進路指導の強化ポイントを把握することが出来る。

ビフォー アフター

活用

異なる進路を多角的に比較させ、
十分な内省を経て面談へとつなげる



新井 志望大選択では学べる内容を十分検討するよう、**1つの大学**

の異なる学部・学科でも構わないので、複数の進路の研究内容を「大別報告書」で比較させたいです。大学の研究内容は高校生にとっては難解な場合もありますが、難関大学の理系学部から大学院進学を志望する生徒も多い本校では、「よく分からないけれど、面白そう」という**知的好奇心をくすぐられる感覚を大切にした**いです。分からないことは教授や大学生に聞いてくれるとう気持ちで臨んでほしいですね。



遠藤 部活動などの事情で1大学しか見学に行けない生徒にも、「**同じ大学内で、複数の学部・学科を比較してみれば、第1志望の学部・学科の魅力がはつきりする**」とアドバ

イスできますね。また、事前に教授や大学生への質問項目を考えさせることで、単なる見学で満足す



新美 OCでの体験が**印象的であればあるほど、生徒に冷静な振り返りを促す事後面談は重要**です。本

校には、早々に志望先を固めてしまいう生徒もいれば、「自分の学力では大学の講義に付いていけないのではないか」と不安を抱く生徒もいます。OCで得た気

付きや不安を「まとめシート」に書かせ、それを基に担任が面談を行い、生徒の思考を整理することが必要です。「君の興味に合った研究は、この大学で



も出来るから、調べてみてはどうか」と面談で生徒の視野を更に広げ、悩ませたいですね。

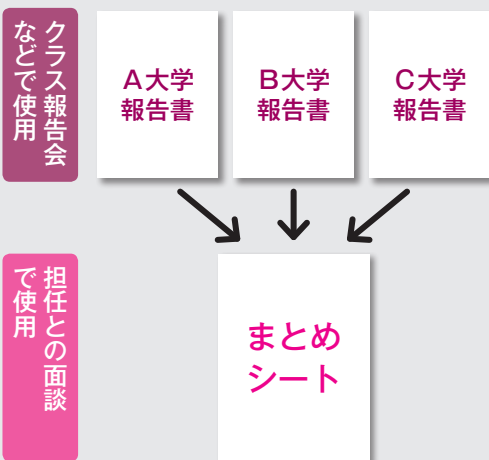
新井 「大別報告書」は調べ学習の成果として、クラス内で閲覧できるようにし、「まとめシート」は担任との面談資料に使うという位置付けが良さそうですね。

遠藤 新井先生の学校では、既に昨年度からOCに参加した生徒のコメントを抜粋したプリントを、次の2年生に配布しているとのことですが、先輩の体験談からOCの大切さが理解でき、事前学習のモチベーションも高められる良い

アイデアだと思いました。

新美 遠藤先生の学校ではOC参加報告書の発表会は、2学年全体の行事だそうですが、そこに1年生も参加させれば、2年生からの大学研究への期待を高められるのではないのでしょうか。先輩から直にOCでの気付きやハプニングを聞けば、「しっかり準備して見学に行こう」という気になるはずですよ。
新井 OCでの体験を語り合う場を設けることで、大学のことを気軽に話せる雰囲気を校内に醸成したいですね。今日の検討結果を、進路指導部で共有したいです。

活用の流れ



OC前に研究内容を中心に見どころや質問事項を書き、OC後に分かったことを書くことで大学別の報告書を完成させる。OCを経て自分の志望に生じた変化や迷っていることなどは、「まとめシート」に記入し、担任との面談に臨む。

「高大接続改革実行プラン」を 高校現場はどう考えるか

東京都立西高校校長

宮本久也^{ひなや}

岡山県立和気閑谷高校校長

香山真一^{こやま}

文部科学省は、2015年1月、高校教育、大学教育、大学入試の一体的な改革を進めるために、

「高大接続改革実行プラン」を策定した。そして、このプランの実現に向けた

具体的な方策について検討する「高大接続システム改革会議」を発足させた。

「高大接続システム改革会議」の委員には、現場の公立高校を代表して2人の校長が名を連ねている。

その2人に、実行プランをどう受け止めたのか、話を聞いた。

実行プランが示した日程に

高校現場は対応できるか？

香山 文部科学省が高校教育改革、大学教育改

革、大学入試改革の三位一体の改革を打ち出したことについて、私は基本的には賛成です。

日本でも、課題解決力を持ち、自律的に活動できる若者を育成するために、改革が必要であることについては、多くの教育関係者が共通に

認識していることだと思います。

ただし、そうした改革は、手順を踏んで進めていかないと、現場の混乱を招く恐れがあります。例えば、センター試験に代わって導入が予定されている「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」では、「思考力・判断力・表現力等の

能力を中心に評価」するとしています。現行課程でも、学力の3要素の1つとして、思考力・判断力・表現力等を育むことが明記され、アク

「高大接続改革実行プラン」の狙いと内容

◎中央教育審議会は2014年12月、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」を提出。これを受け、文部科学省は15年1月、「高大接続改革実行プラン」を策定し、改革への道筋とスケジュールを示した。本プランの狙いは、高校教育、大学教育、大学入試を一体的に改革し、「知識・技能」のみならず、「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」といった真の学力を育成・評価するための体制の構築にある。高校教育についての具体的な内容としては、学習指導要領の抜本的な見直しや、主体的・協働的な学びを重視した教育の展開、大学教育については、アクティブ・ラーニングの導入やSDの義務化などによる大学教育の質的転換、学生の学修成果の把握・評価の推進などがある。高校教育の質の維持・向上、及び生徒の学習改善を目的とした「高等学校基礎学力テスト（仮称）」や、センター試験に代わり大学進学希望者の学力を測る「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入も打ち出された。

PROFILE



東京都立西高校校長

宮本久也

みやもと・ひさや

◎教職歴 36 年。同校に赴任して 4 年目。東京都教育庁指導部指導企画課長等を経て、現職。



岡山県立和気閑谷高校校長

香山真一

こうやま・しんいち

◎教職歴 34 年。同校に赴任して 3 年目。岡山県立岡山操山高校教諭等を経て、現職。

タイプ・ラーニングなどに取り組む高校も増えてきました。しかし、これらの力をどのように生徒に付けさせるかについては、まだ試行段階です。ですから、まず、高校現場が生徒の思考力・判断力・表現力等を育むための手法を確立し、その手法を普及させた上で、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を導入するのが、本来の手順ではないかと思えます。

ところが、国は 2020 年度導入を目標に掲げています。「高大接続システム改革会議」において、私は高校の状況を知っている委員として、高校側の要望を伝えていきますが、それでも 20 年度からの実施が決定された場合、高校はその日程に合わせた対応を迫られることとなります。

宮本 香山先生が言われるように、現行課程でも思考力や判断力などの育成を目指すことが示されていますが、まだ段階的なのです。ですから、大学入試も、現行課程で目指す学力を、生徒がきちんと身に付けているかどうかを測るものであってほしいと思います。そして、次期学習指導要領が、本格的に思考力・判断力・表現力等を養うことを中心に据えた内容になった時に、大学入試もそれに沿ったものに変えていく。そうした段階を踏んで、改革を進めるべきです。

ところが、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を 20 年度から実施した場合、現行課程

の半ばで新しい形態の入試が導入されることとなります。そうすると、「今の学習指導要領で付けさせることが出来る力」と「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」で求められる力との間に、不整合が起きるのではないかと不安があります。

もう 1 つの危惧は、大学入試改革自体はよしとして、大学側がそれに対応できるだろうかという事です。「高大接続改革実行プラン」では、各大学が実施する個別入試についても、知識や技能だけを測る試験ではなく、「多面的・総合的な評価への転換を図る」ことが示されています。そのために「一般入試、推薦入試、AO 入試の区分を廃止した新たなルールを構築する」とあります。つまり、AO 入試で行われている小論文やプレゼンテーション、集団討論などの試験を通じて、受験生の学力を評価する入試形式を、今後は標準にしていこうということだと思います。

ただし、そうした入試では、受験生一人ひとりの学力を丁寧に見ていくことになるため、時間が掛かりますし、人的なパワーも必要です。私を含めて多くの高校の先生方は、「本当に大学はそうした入試を全面的に実施できるのだろうか」と思っていることでしょう。「A 大学は多面的・総合的に評価する入試に転換したが、B 大学では従来のまま」というのでは、高校は対応に苦慮してしまいます。

授業デザインの変更が 求められている

香山 私も、大学が多面的・総合的に評価する入試を全面的に導入するのは難しいと考えています。全体の入学定員の30～50%にとどまるかもしれませんが。そうすると、多面的・総合的に評価する入試と、従来の一般入試的な入試のどちらで生徒が受験をすることになったとしても対応できるように、高校は授業のデザインを変えていく必要があると思います。

また、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」では、通常の「教科型」の問題に加えて、「合教科型」や「総合型」での出題も検討事項となっています。現段階では問題内容は明確ではありませんが、例えば、統計やグラフに示された数値を見ながら、日本語や英語で文章を書くというように、各教科で培ってきた知識・技能を総合的に活用する力が求められる出題が予想されます。そうした知識・技能を横断的に活用しながら課題を解決していく力を身に付けるためには、「総合的な学習の時間」をどう活用するかが鍵になると思います。

宮本 「多面的・総合的な評価」や「知識・技能の活用力」を問う入試に対応できる学力を生徒に身に付けさせるためには、授業で言語活動を行う場面を意識的に組み込むことが大切です。本校でも、数学の授業において、生徒同士



で小グループになり、話し合いながら問題を解き、その解答を全体発表させるといった活動を行っています。言語活動は、数学でも英語でも保健体育でも、あらゆる教科で取り入れることが可能です。

しかし、多くの教師は、従来の授業デザインや指導法からなかなか抜け出せていません。先進校の事例などを参考にしながら、学校全体として授業改善に取り組む必要があるでしょう。

「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の 可能性と危うさ

宮本 「高大接続改革実行プラン」では、高校での学習の達成度を測ることを目的とした「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の導入も予定されています。このテストによって、生徒が自分の学習の状況を客観的に把握して学習改善に役立てたり、教師がテストの結果を分析して指導改善に生かしたりといったことが出来るならば、非常に意味のあるテストになると思います。

一方で心配なのは、「高大接続改革実行プラン」で、大学は入試の際、調査書に「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の結果記入欄を設けるなどして、テストの結果を選抜の資料に用いることも可能としていることです。

また、実施時期や学年については、2年生の夏から秋以降に複数回実施することも検討されています。もしテストの結果が入学者選抜の資料に用いられるとなれば、それは実質的な入試の前倒しを意味しています。そうすると、教師も生徒も、試験対策をせざるを得ません。2年生の2学期は、生徒が文化祭などの学校行事に打ち込み、部活動では中心メンバーとして活躍するなど、高校生活が最も充実する時期です。生徒は授業だけでは得られない様々な経験をします。その貴重な時期が、試験対策一色で潰されてしまうとなれば、高校教育全体をゆがめて

しまうことになりかねません。ですから「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は、あくまでも生徒のその時点での学習の達成度を測ることを目的としたものとするべきです。

香山 同感です。私は「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は、小・中学校段階の基本的な問題から難度の高い問題まで、出題の範囲を広げることで、どの学力層の生徒が受けても、今後の学習の目安になるものにするのが大事だと思います。そして、テストを受けた結果、「自分は中学2年生の時のこの単元でつまづいたから数学が苦手になったんだな」といったことが明らかになれば、教師も生徒も今後の手立てが見えてきます。何につまづいているのかに気付かせ、学習改善に生かすための仕組みとして活用できれば、学習につまづいてしまった生徒にとつて、学ぶ喜びを取り戻す機会になるでしょう。そのためにも、このテストを進学時や就職時の選抜の資料として用いてほしくありません。

高校と大学が連携して 生徒、学生を育ていく

宮本 最後に、三位一体の改革の柱の1つである大学教育改革についてですが、本校の生徒を見てみると、昔の高校生と比べて、非常に厳しく大学を評価していると感じます。「大学にさえ合格すれば、その先の人生は何とかなる」と考えている生徒はわずかで、「この大学や学部

は、自分にどのような力を付けさせてくれるのか」という視点で志望校を選んでいきます。進学するだけの価値があると判断した大学は受験しますが、そうではない大学は、初めから受験対象から外しています。そのため、併願校数はとても少なくなりました。そうした意識の変化は、本校の生徒に限ったものではなく、全国的な傾向ではないかと思えます。そうであるならば、大学側もうかうかとしてはいられなくなります。つまり、大学に教育の質的転換を促すためには、生徒を大学に送り出す高校現場や生徒自身が、大学の教育の質を厳しく問うことが、非常に有効なのではないでしょうか。

香山 これからは、自分が入学したい大学が国内になれば、海外の大学を選択するという時代になるでしょう。日本の大学は、どこも強い危機感を抱いていると感じます。重要なことは、高校と大学が同じ問題意識を共有しながら、生徒や学生の育成に共に取り組んでいくことです。そうした動きが全国の高校と大学に広がっていくけば、日本の教育は大きく変わるのではないのでしょうか。

私は、教育改革を進める際には、教育における不易の部分に立ち戻り、育てたい生徒像、学像を見つめ直すことが大切になると思えます。『論語』の中に「学びて思わざれば則ち罔し。思いて学ばざれば則ち殆し」という章句があります。「学んでも自分で考えることをしな

ければ、他人の意見に絡め取られてしまうことになる。また、いくら自分で考えても、学ぶことをおろそかにしては危険である」といった意味です。主体性を持って自分で考えることと、知識・技能を得ることの両方が重要であると説いた言葉です。つまり、これからの時代に必要とされる学力とは、実は孔子の時代から重視されていたことなのです。だから私は、今回の教育改革では、全く新しいことが求められているわけではないと捉えています。

宮本 その通りだと思います。日本の教育が培ってきた集団教育は今後も有効だと、私は考えています。特に高校現場の場合、様々な資質や性格を持つ生徒が、3年間、同じ教室で学びます。そうした集団の中で、他者と協力しながら物事を成し遂げていく力や、相手を尊重しながら自分の意見を相手に伝えていく力などを身に付けていきます。今回の教育改革では、「主体性を持って多様な人々と協働することを通して、喜びや糧を得ていくことが出来るようにすること」が目指すべき姿として掲げられています。まさに高校の教室は、これまでも今後、そうした力を養う場であるといえます。

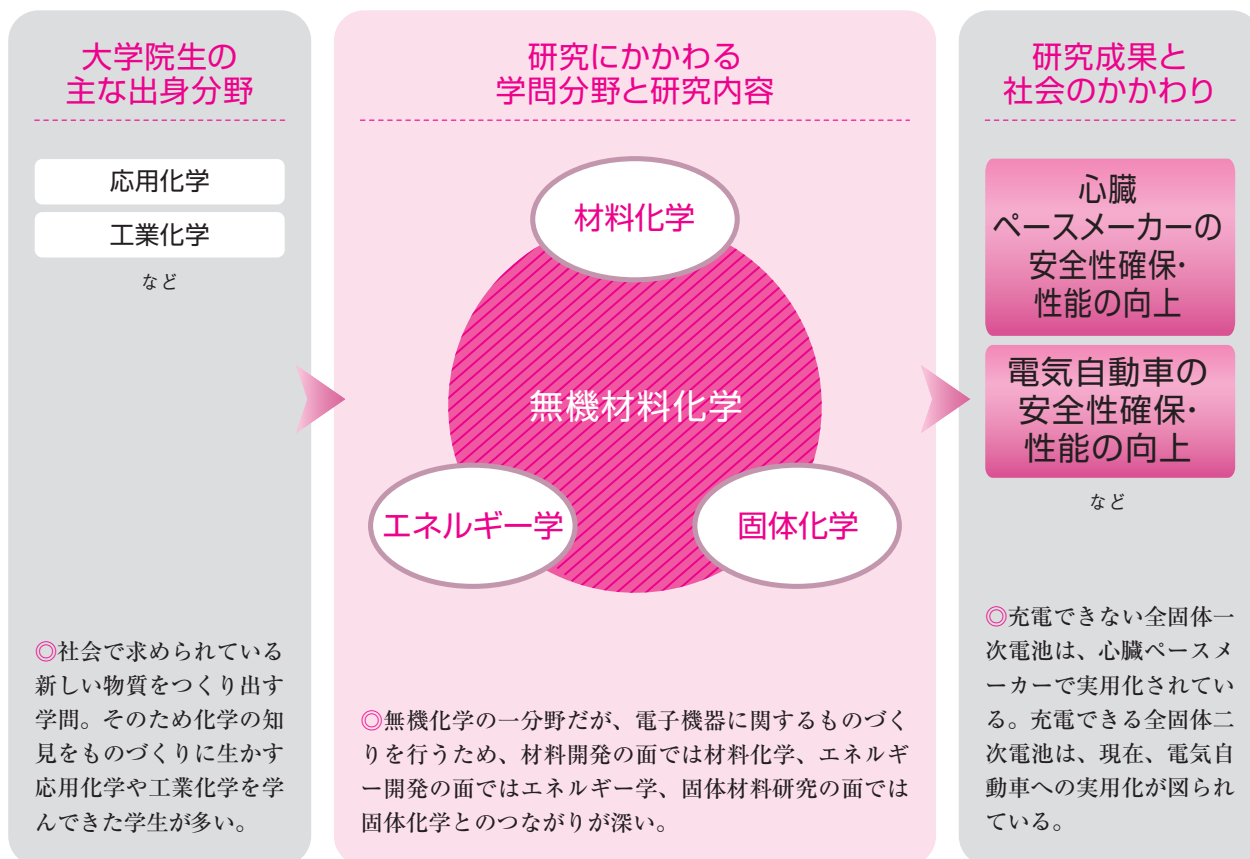
香山先生が言われたように、教育改革だからといって、特別に身構えることはありません。原点に立ち戻って、学校の普遍的な役割や育てたい生徒像を考えれば、やるべきことが見えてくるのだと思います。

「全固体二次電池」の実用化を進め 電子機器の安全性と性能を高める

大阪府立大大学院 工学研究科 ^{たつみさご}辰巳砂昌弘研究室

発火の恐れがなく、品質を長く維持でき、更にガソリンに匹敵するエネルギーを保持させられる可能性もあるというように、「全固体二次電池」はまるで夢のような機能を備えている。全固体二次電池の開発は難しく、以前はSFの世界でしか実現できないと考えられていたが、近年、日本で研究が急速に進み、実用化の一手手前まで至った。これを可能にした無機材料化学の第一人者である大阪府立大大学院工学研究科の^{たつみさご}辰巳砂昌弘教授に、最新の研究とその成果を聞いた。

フローチャートで分かる辰巳砂昌弘研究室



常に新たなアイデアを出し、検証しようとする姿勢が必要

無機材料化学が求める学生像

柔軟な思考力

粘り強く取り組む姿勢

旺盛なチャレンジ精神

無機材料化学は、今までにない性能を備えたものをつくり出す学問です。どうすれば実現できるのかが誰にも分からない研究に取り組むことが多いので、既存の定理や公式をただ身に付けているだけでは太刀打ち出来ません。自分で考えて工夫し、時には定められた手順を破る必要もあります。そのため、常識にとらわれない、柔軟な思考力が求められます。

新たなひらめきがあれば、それを検証するために実験を行います。しかし、実は予想したような結果が得られることは、ほとんどありません。新しい物質やそれを作る技術を開発しようとしているのですから、簡単に実現できるわけがないのです。失敗の要因が、実験の方法にあることも、自分のアイデアにあることもあります。なぜ仮説と異なる結果になったのかを冷静に検討して、改善策を立て、改めて実験に臨む根気強さが欠かせません。

今研究している全固体二次電池は、私が大学院生だった頃は開発が不可能だと考えられていました。だからといって諦めてしまえば、技術の進歩はありません。「この手で不可能を可能にしたい」という、チャレンジ精神にあふれた皆さんに学んでほしいと考えています。

高校生へのメッセージ 研究では、正解がいくつもある問題や正解のない問題に取り組みますから、ものごとを多面的に見る力が求められます。そこで、自分と異なる考えに多く触れ、それを受け入れる練習を高校時代におきましょう。地域の活動やボランティアなど、幅広い年齢層の大人と交流する機会をつくってみてはいかがでしょうか。



辰巳 砂昌弘 教授

たつみ さし・まさひろ 大阪府立大学大学院工学研究科長、教授。同大工学部部長。同大大学院・大阪府立大学大学院博士課程教育リーダーインテグレーション「システム発想型物質科学リーダー養成学位プログラム」コーディネーター。大阪府立大学大学院工学研究科博士前期課程修了。大阪府立大助教などを経て、現職。国際ガラス委員会ゴッタルディ賞などを受賞。主な著書に、『全固体電池開発の最前線』（シーエムシー出版）などがある。

研究概要

安全性が高く 寿命も長い 究極の電池を実用化

無機材料化学とは、ガラスやセラミックスなどの無機材料を用いたものづくりを行い、コンデンサーや半導体などの機能を向上させる学問です。

私は、電解質にも電極にも固体を用いる充電可能な電池、全固体二次電池の研究に取り組んでいます。

充電の可否を問わず、電池は内部で化学反応を起こすことでエネルギーを生み出します。化学反応は、マインナス極にたまる陽イオンが電解質を通り、プラス極に移動することで生じます。そのため従来の電池には、固体に比べてイオン伝導性が格段に高い液体の電解質、特に有機溶媒の電解質が用いられてきました。

ただ、電池は液漏れが起きればショートしますし、有機溶媒は可燃性です。つながる危険性もあります。また、液体の中では陽イオンだけでなく陰イオンも動くので、電池内部ではエネルギーを生む化学反応と共に、電池が劣化する要因の副反応も起きま

す。充電を繰り返すと二次電池の寿命が縮まるのは、そのためです。

全固体二次電池は、こうした液体の電解質に起因する課題を根本的に解決し、高い安全性と長寿命を実現する、いわば究極の電池です。しかし、開発が難しく、実用化は夢物語だと、以前は考えられていました。

開発の最初のハードルは、電解質として使用できるほどのイオン伝導性を持つ固体がないことでした。しかし、2000年代になると、日本でイオン伝導性の高い固体が開発されます。私も、ガラスなどの固体の無機材料に、有機電解液に近いイオン伝導性を付与することに成功し、更にイオン伝導性を高めようと、固体の無機材料を新たに加工する方法の開発に取り組むようになりました。

続く課題は、固体の電解質と電極との界面をうまくつくれないことでした。電池内部の化学反応には、電解質と電極とが接触している必要があります。接触する面積が大きいほど多くのエネルギーが得られます。従来品のように電解質が液体であれば、電極の表面に満遍なく広がり、広い界面が出来ますが、電解質に固体を



写真 空気中の水分などと化学反応を起こさないように、特殊なガスを充満させたグローブボックスという箱の中に固体の電解質を入れ、実験を行う

用いると、電極との界面が限定されてしまうのです。方法として、電解質と電極とを粉末にして混ぜ、そこに圧力を加えれば、広い界面をつくれることが分かっています。液体の電解質に比べると界面が狭く、コストも掛かるといふ問題があります。それでも、この方法で全固体二次電池は実用化一歩手前の段階までに、現在は至っています。

私は長年、電極にリチウムを用いた全固体二次電池を研究してきましたが、近年は電極にナトリウムを用いた全固体二次電池の研究にも力を入れていきます。産出量が少なく、高価なりチウムと異なり、海水から作れるナトリウムは安価なため、全固

体二次電池の生産コストを下げることにつながります。電極にナトリウムを用いれば、固体の電解質にもナトリウムイオン伝導性が重要です。私は最近、ナトリウムイオン伝導性が高い固体電解質を開発し、従来は困難だった室温での稼働に、世界で初めて成功しました。これは、全固体二次電池の低コスト化と大量生産

はさほど関心を抱いていないのではないかという思い込みがありました。しかし、実は電池メーカーも全固体二次電池の開発に期待していたのです。そして、私はそれをこの手で実現したいと考えるようになりました。それから15年ほどの間に、全固体二次電池の開発は急速に進みました。固体電解質のイオン伝導性は液体の電解質を既に上回っていますし、電極との界面を低コストで広げるとい

研究の展望

エネルギー問題や環境問題の解決にも貢献できる

私

が全固体二次電池の研究に取り組み始めた

きっかけは、90

年代後半から、

全固体二次電池

の開発を目指す

日本学術振興会

のプロジェクトに参画したことです。

プロジェクトにアドバイザーとして

参加していた複数の電池メーカーの

研究者は、全固体二次電池の開発に

ついて、「現状では実現の可能性は

低い

が、研究を進めていき、将来的には積極的に支援したい」と口をそ

ろえました。それまで私には、従来の

製品を否定することになりかねない

全固体二次電池に、電池メーカー

によって改善されつつあります。また、液漏れによるショートの心配が全くない全固体二次電池の優れた安全性は、近年、電気自動車の開発に熱心な自動車メーカーから注目

され、実用化を進める共同研究が盛んに行われるようになりました。

内燃エンジンに匹敵するエネルギー

を持つ全固体二次電池が開発されれば、エネルギー問題や環境問題の解決にも貢献できるでしょう。

日本の全固体二次電池の研究水準

は、世界最高レベルです。「最先端の研究で世界を牽引したい」。こう

した熱意のある皆さんが参加してくれることを、心から願っています。

用語解説

1 電解質

本来は、液体に溶かした時にプラスとマイナスのイオンを生じさせる物質を指す。ここでは、プラス・マイナス両電極の間でイオンを通す、電池内部の物質を指す。

2 イオン

電気を帯びた原子または分子。プラスの電気を帯びたものを陽イオン、マイナスの電気を帯びたものを陰イオンという。

3 イオン伝導性

イオンを通す性質。

4 有機溶媒

水に溶けない物質を溶かす、液体の有機化合物の総称。エタノールやベンゼンなど。

5 充放電

充電と放電、つまり、エネルギーを蓄えることとエネルギーを放出すること。

6 界面

接触する2つの相の境界面。物質の物理的・化学的性質が等しい領域を相といい、気体、液体、固体の相を、気相、液相、固相という。全固体二次電池では、電解質の固相と電極の固相との界面形成が課題となる。

7 内燃エンジン

燃料を燃焼させてエネルギーを得るエンジン。

全固体二次電池の 効率的な実用化のために



伊東 裕介さん

いとう・ゆうすけ 大阪府立大大学院工学研究科博士後期課程2年。奈良県立奈良高校卒業。日本学術振興会特別研究員 (DC 1)。

Q なぜこの研究分野に進んだのですか

A 私は高校時代、化学が好きでした。それは、使い捨てカ

イロが空気に触れるとなぜ温かくなるのかなど、子どもの頃からの疑問に答える知識が得られたからです。そして、社会に役立つものづくりがしたいという気持ちが高まり、大学では化学を学ぼうと決めました。

大学では、電池の研究に没頭しました。高校の授業でも、イオンの動きをイメージするのが楽しく、電池

の実験が好きでしたが、大学で専門的な知識を身に付けると、夢中になりました。そこで、究極の電池である全固体二次電池の研究に携わりたいと考えるようになったのです。

Q 辰巳砂教授の研究室での研究内容を教えてください

A 全固体二次電池の実用化を進める上で最大の課題となる

のは、電解質と電極との界面形成であるといわれています。しかし、それが解決されても、高品質の全固体二次電池をすぐに安価で量産できるとは限りません。そこで私は、界面形成以外の課題を洗い出す研究に取り組んでいます。

研究には、界面形成を克服した全固体二次電池を用います。コストが掛かるので実用化には適しません。電解質の被膜で電極を覆う方法であれば、理想的な広い界面をつくれるのです。そして、作製した全固体二次電池の性能を、出力量や寿命など様々な面から、液体の電解質を用いた従来の電池と比較します。

その結果、全固体二次電池は従来品よりも充放電に時間が掛かることが分かりました。これは、固体の電

解質のイオン伝導性が低いことに起因します。つまり、既に開発された、イオン伝導性の高い固体の電解質は、私が見ている方法ではうまく界面をつくれないうのです。界面形成の方法が進歩してコストが削減されたとしても、この課題は残りますから、固体の電解質を新しく開発することも検討する必要がありますでしょう。

一方、生み出すエネルギーは、従来品に匹敵していました。私が研究で用いる界面形成方法では、実用化された全固体二次電池の界面形成方法よりも電解質の量を減らせます。その分、電極の量を増やせば、更に高いエネルギーが生み出せます。

この研究は、全固体二次電池を効率的に実用化するための大きな足掛

かりになると期待しています。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 私は大学に入ってから、物

理学や生物学と化学との関連性など、学問同士のつながりが把握でき、興味の幅が広がりました。高校時代にそれに気付いていたら、もっと勉強が楽しくなっていたでしょう。皆さんには高校時代から、学問への視野を広げてほしいと思います。そこで、自分の興味がある学問が大学でどのように研究されているかを、研究室のホームページで調べることをお勧めします。分からないところは、高校の先生に質問しましょう。学問の関連性が見え、好きな教科・科目が増えると思います。

私の高校時代

文化祭の練習で身に付けた コミュニケーション能力

●高校時代の一番の思い出は、毎年9月に行われた文化祭です。3年間クラスごとに企画を立て、出し物をしました。準備は夏休み中に始めるのが恒例でした。例えば、校庭でダンスを踊った1年生の時は、夏休み後半から毎日のように登校し、事前に選んでおいた曲に合う振り付けを考えながら、練習を重ねました。決まりかけた振り付けでも、曲調に合っていないと言う友人が1人でもいれば、全員で考え直しました。「クラスの誰もが納得する出し物にしたい」という気持ちが一人心にあってからでしょう。出し物が変わっても、それは同じです。クラスの友人たちと意見を交わす中で、他者が分かりやすいように、自分の意見を整理して話せるようになったと思います。

文化祭の準備での経験は、多くの人とコミュニケーションを取って進める必要がある大学での共同研究にとても役立っています。

「OECDイノベーション教育ネットワーク」(※名称調整中) 発足記念シンポジウム

OECDの全面協力の下で発足 産学コンソーシアムが描く次世代の学びとは

次世代の学びの開発に取り組み「OECDイノベーション教育ネットワーク」(※名称調整中)の発足記念シンポジウムが、2015年4月、東京大学伊藤謝恩ホールで開催された。本ネットワークは、今後、OECDと連携して研究や実践を進め、その成果を国内外に発信していく。OECD事務総長のアンヘル・グリア氏が参加したシンポジウムの模様をレポートする。

次世代の学びの開発と普及を目指すネットワーク

本ネットワークは、次世代の学びの開発と普及を目的として発足した産学コンソーシアムだ。東京大公共政策大学院に事務局を設け、OECDの事業「Education2030」のワーキンググループと、国際協働による教育研究・分析を推進するシンクタンク活動、教育研究と先進的な実践を連携するドゥータンク活動を推進する。

シンポジウムには、OECDのアンヘル・グリア事務総長、本ネット

ワークのボードメンバーや政府関係者らが参加。東京大大学院の秋田喜代美教授が21世紀型カリキュラムについての基調報告を行った。

次に、ドゥータンク活動を担う事業「OECD地方創生イノベーションスクール2030」の取り組みが報告された。本事業は、東日本大震災後の復興教育「OECD東北スクール」の後継事業として、東北・広島・和歌山・高専の4つのクラスターが「環境・エネルギー・防災」「グローバル社会」「少子化・高齢化・ICTを踏まえた人材育成」をテーマに約3年間、研究・実践活動を行う。その活動内容が報告された。

「OECDイノベーション教育ネットワーク」(※名称調整中) 発足記念シンポジウム プログラム

- **主催者挨拶**
OECDイノベーション教育ネットワーク チェアマン兼ボードメンバー
東京大教授 鈴木寛氏
- **来賓挨拶**
OECD事務総長 アンヘル・グリア氏
衆議院議員 根本匠氏
文部科学事務次官 山中伸一氏
OECD日本政府代表部 特命全権大使 児玉和夫氏
- **挨拶**
東京大総長 五神真氏
東京大大学院 教育学研究科長 大桃敏行氏
- **基調報告**
OECDイノベーション教育ネットワーク ボードメンバー
東京大大学院 教育学研究科教授 秋田喜代美氏
- **研究体制説明**
OECDイノベーション教育ネットワーク事務局 研究コーディネーター
静岡大学術院教育学領域 准教授 益川弘如氏
- **リレートーク**
東北クラスター
広島クラスター
高専クラスター
和歌山クラスター
- **閉会挨拶**
東京大公共政策大学院 院長 城山英明氏



「OECD イノベーション教育ネットワーク」(※名称調整中) 発足によせて

教育の新たな歴史が始まる

OECDイノベーション教育ネットワーク チェアマン兼ボードメンバー

東日本大震災後の創造的復興教育「OECD東北スクール」は、事務総長のグリア氏を始め、OECDの多大な支援により大成功を収めました。2014年8月には、パリ・エッフェル塔前のシャン・ド・マルス公園で、中高生84人の企画・運営により、集大成となるイベントを開催し、15万人の人々に復興した東北の姿を見ていただきました。

多くの仲間や知恵が集結したこの事業の流れを加速させ、広げ、深めていくことが、本ネットワークの設立趣旨です。OECDによる2030年に向けた教育のあり方を検討する事業「Education2030」には日本も加盟国として参加していますが、その中で、本ネット

東京大教授 鈴木寛

ワークはOECDと日本の現場・研究者を結びエゾンになりたいと考えています。

私たちは、アカデミズムに基づくディープなリサーチだけではなく、現場と直結して先端的な実践を進めていきます。それを、高校や大学、自治体、企業、そしてOECD加盟国の仲間と一緒に展開する。そうした意味で、「国際協働型プロジェクト」と呼んでいるのです。

2030年に向けた教育を創り出す取り組みが、まさに今日から始まります。教育の新たな歴史を皆さんと一緒に築いていきましょう。



悲劇の中から生まれた変革の種

OECD事務総長 アンヘル・グリア

4年前、震災直後の日本を訪れた際、被災者の人々に会い、次世代を担う若者の獨創性からインスピレーションを受けて、「OECD東北スクール」をスタートさせました。この事業では、生徒を自立させる、地域の復興を考え、支援する、イノベーションの能力を身に付ける、そして、考えを実行させることを大切にしました。昨年、被災地に足を運び、「OECD東北スクール」を視察し、素晴らしい復興が進んでいるのを目の当たりにし、うれしく思いました。

彼らが、考えるだけでなく、行動できたのはなぜでしょう。それこそが教育の成果だと考えます。現実の問題にフォーカスしたプロジェクトベースの学習を通じ、生徒と教師は地域社会をどう

復興させるのかを議論し、ローカルに、そしてグローバルに行動しました。その中で、生徒はどのように行動すべきか、どのように学ぶべきかを学んだのです。そして、未曾有の悲劇から、日本の教育制度のドラマチックな変革の種をつくり出すことが出来ました。それを引き継ぐ本ネットワークが成果を幅広く共有し、東北から日本全体へ、そして世界へと普及させることを期待しています。

この変革への取り組みは、震災で命を落とし、行方不明となっている何万人もの方々へのオマージュとなるでしょう。OECDとして、この素晴らしい冒険に参加できることを誇りに思います。



世界の先頭を走る教育の実践を期待

文部科学事務次官 山中伸一

「OECD東北スクール」の手法は、生徒自身が具体的な目標を見つけ、考え、実行することを支援するというものでした。教師は指示するのではなく、あくまでも生徒の支援に徹する。そうした手法によって主体的に行動するようになった生徒たちは、教師を始めとした周囲の大人を動かし、地域や社会を巻き込んで展開しました。最後は、OECD本部があるパリにおいて、2日間で15万人が訪れるイベントを成功させました。それには、生徒だけではなく、学校も、そして文部科学省も驚かされました。これが教育の力なのだ改めて実感し、日本の教育を担う立場としての責任の重さを再認識しました。

「OECD東北スクール」の成果は「Education2030」にも影響を与えています。また、文部科学省では、学習指導要領のナショナルスタンダード・カリキュラムを検討していますが、その中では、OECDが示すキー・コンピテンシーの育成や、課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学習方法、すなわちアクティブ・ラーニングについて議論しています。「OECD東北スクール」の試みに端を発する本ネットワークの研究・実践は、そこで大いに生かされることでしょう。今後、日本、そして世界の先頭を走るような教育を推し進める原動力となることを期待しています。



東京大の教育改革との連携を模索

東京大総長 五神 真

今後、世界はこれまでに経験したことのない課題に直面するでしょう。そうした時代において社会的・職業的な自立を図るためには、主体的に課題を発見し解決する能力や、仲間と協働して創造的に物事を進める能力が重要です。本ネットワークは、そうした能力を育むために必要な学習方法やカリキュラム、教員のあり方、評価方法などについて、一定の解を見いだすことが求められています。

2015年度、本学の入学式で、私は新入生に「知のプロフェッショナル」を目指すための3つの基礎力として、「新しいアイデアを生み出す力」「考え続ける忍耐力」「原理に立ち戻って考える力」を

身に付け、知の創造のために行動してほしいと述べました。行動するためには、多様性を尊重することにより自分の立ち位置を捉え、相対化する広い視野が必要であることも伝えました。

「知のプロフェッショナル」として、課題を解決し、人類社会に貢献する人材を育成するために、東京大では様々な教育改革を進めています。その取り組みは、本ネットワークの問題意識や事業と相通じるもので、両者の効果的な連携が期待されます。本ネットワークの取り組みが大きな成果を生み出し、日本が主導して21世紀型の教育モデルを世界に普及させていくことを願っています。



基調報告「OECD調査研究をベースに実践する 21世紀型カリキュラム・教授法・評価法」

立体型のカリキュラムへの移行に伴い、 学習法や教授法、評価法は大きく転換する

人格・態度やメタ認知をカリキュラムを通して涵養

本ネットワークが育成を目指す人材像は、新しい地域・国・世界を創るイノベーターです。大きく変化する社会に対応し、自分が生きている地域からグローバルな視点で課題を解決する力を育成するカリキュラムのあり方を検討しています。

知識やスキルを育成するだけの従来型カリキュラムを「平面」とするならば、21世紀型カリキュラムは「立体（4次元）」といえます（図1）。もちろん、知識・スキルは大切ですが、更に奥行きとして、「キャラクター」「アティチュード」と呼ばれる人格・態度形成、及び自己の振り返り、いわゆるメタ認知が出来る力を涵養することが重要になります。つまり、カリキュラムを通して、知り、行動し、その人らしく振る舞い、振り返るという学習過程を考えていくわけです。

カリキュラムの変化に伴い、従来とは異なる教授・学習方法が求められます。「OECD東北スクール」では、生徒自身が学びをデザインし、実行し、振り返り、次の行為を決定するという過程が重視されていました。そうしたプロジェクト型学習を効果的に行うためには、アクティブ・ラーニングが不可欠です。生徒の深い学びを促すためには、多様な学習方法を組み合わせる必要があります。「OECD東北スクール」でも、対話する、議論・熟議する、遊びながら学ぶ、創造する、実社会と交わるといった活動が柱となっていました。このように、多様なアクティブ・ラーニングの手法を学び、教師が目的に応じて使い分けることが重要でしょう。

現状維持型の教師から「触媒」となる教師へ

「OECD東北スクール」の取り組みから、ダイバーシティ（多様性）が生み出すイノベーションにも注目しています。異なる被災体験を持つ生徒が出会う、被災地と非被災地が交わる、生徒と教師が対等に協働する、海外とつながる、産学官が連携する、多様なコミュニケーションツールを使用するなど、多様性の中でメタ認知や人格・態度の涵養を含む確かな成長が見られました。

生徒の成長の裏には、教師の挑戦と変化もありました。生徒が取り組んだのは実生活のリアルな問題であり、教科書にはその問題の解決方法は書かれていません。そうした解のない課題への教師の対応は、2タイプに分かれました。1つは、生徒にプロジェクトをデザイン・リードさせ、教師は生徒の発言を価値付けるなど「触媒」となるタイプ、もう1つは教師がプロジェクトをデザイン・リードして、生徒に答えを与えようとする現状維持型の教師です。これからの教育には前者のタイプの教師がより必要になります。つまり、21世紀型教師に求められるコンピテンシーも、「平面」から「立体」へと変化するでしょう（図2）。生徒と同様、知識・スキルに加え、人格・態度形成とメタ認知が求められるのです。

学習評価法も極めて重要です。評価には大きく分けて、「学

東京大大学院 教育学研究科教授 秋田喜代美



習を評価（規準・基準に到達できたかを評価）」「学習のための評価（学習改善のための評価）」「学習としての評価（指導と評価の一体化）」があります。評価方法も21世紀型カリキュラムと連動し、立体になるでしょう（図3）。スキルに関しては、パフォーマンス課題やルーブリックでの評価、人格・態度形成に関しては、行動観察や個人レポート、メタ認知に関しては、個人の振り返りや個人エッセーなどが考えられます。

以上が、本ネットワークが目指す方向性です。まだ抽象的なレベルですが、今後、各クラスターとの実践を通して、カリキュラムや教授・学習法、評価法の新たな形を模索していきます。

図1 21世紀型カリキュラム

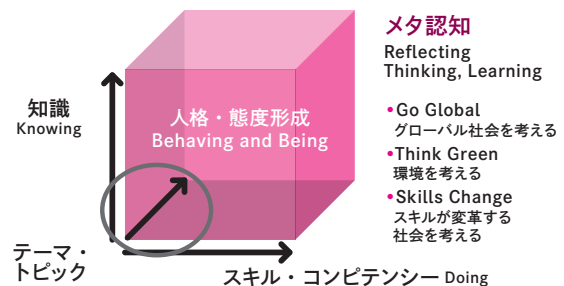


図2 21世紀型教師に求められるコンピテンシー

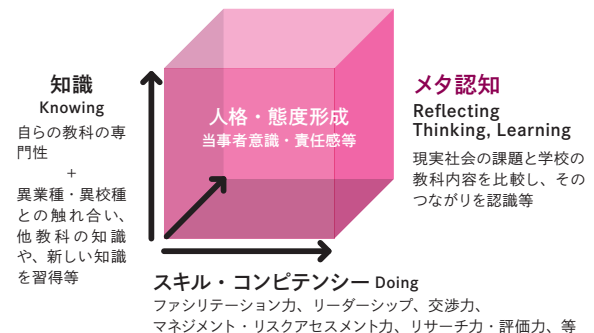
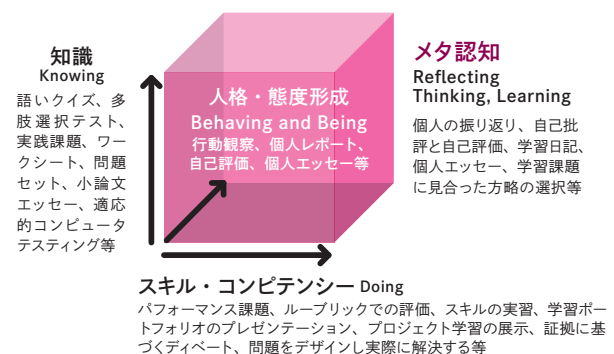


図3 21世紀型学習評価法



「OECD 地方創生イノベーションスクール 2030 クラスタ」紹介

東北クラスター

「OECD東北スクール」の成果を踏まえ、環境問題や再生エネルギーといったテーマを中心に震災復興を見据えた活動を展開していく。地元企業やNPO法人との連携に加え、海外との連携も重視する方針である。プロジェクトを通じた学校や生徒の変化を明らかにすることも、重点実行事項の1つ。現時点では、福島・宮城両県の6校の中学・高校が参加する予定で、福島県内の学校に対しては事務局の福島大が、宮城県内は宮城教育大がそれぞれサポートする。更に、6校以外にも、サブチームとして地域活動を推進する。

広島クラスター

グローバル化への対応をメインテーマとして、『違い』に気付き、尊重し、それを力に変えて、異なる他者と協働しながら、『違い』を乗り越えられる力』の育成を目指す（事務局は広島県）。広島県内から公募によって選考した高校1・2年生50～60人が参加し、広島と世界を元気にすることを目的としたプロジェクト学習を通じて、世界の高校生と協働する。海外のパートナーは、ハワイの高校、及びアジア地域の高校の2校を予定している。

和歌山クラスター

事業に参加する4校の高校がある地域は、いずれも過疎化が進み、地場産業の衰退を始めとした課題を抱えている。地域の課題についての情報を発信するなど、多くの人々に現状を知ってもらうことを出発点として、海外の地方都市の高校などと国際交流を行い、新たな課題やその解決策を模索していく。シンポジウムでは、和歌山クラスターに参加する和歌山県立日高高校の生徒から、同校の運営によって2014年10月に開催された「アジア高校生フォーラム」の様相も紹介された。

高専クラスター

高専では早期からPBL (Project-Based Learning) を取り入れてきた。現在は、21世紀型スキルを中心に育てたい力の到達目標を設定し、その達成に向けた授業内容や評価方法の開発に力を入れている。そうした教育改革の経緯を踏まえ、高専クラスターでは、「次世代型リーダー育成教育プログラム」並びに「世界レベルの情報セキュリティ人材育成プログラム」を開発し、2020年の時点で日本の高専を世界最高レベルの教育機関に押し上げることを目指す。

福島のイメージを変革したい

福島県立ふたば未来学園高校1年生
日下雄太



ふたば未来学園高校には、「ふるさと創造学」という科目があります。これは、双葉郡の魅力や課題などについて調べてまとめ、県内外の人々に発信する科目です。主にこの授業を通して地域の課題に取り組み、Skypeなどのコミュニケーションツールを活用して、国内外の他のクラスターと積極的にコミュニケーションを図りたいと考えています。特に、海外の高校生との交流を通して、グローバルな考えを培いたいと思います。

福島は、非常に残念な形で、世界的に有名になっている現実があります。私はその状況を逆手に取って「チャンス」と捉え、福島のイメージを大きく変革していくことを目指しています。

国際交流を通じ、地域の課題解決を

高知工業高等専門学校 電気情報工学科3年生
秋山美穂



私の出身地の大豊町は高齢化が進み、主要産業の林業も衰退しつつあります。私の父は電気関連会社に勤務し、電線に接触する木を切ったり、停電を復旧したりする作業などをしています。危険ですが、町には不可欠な仕事です。そんな父が楽しそうに仕事の話をするのを聞き、私も電気の分野に興味を持ちました。本校で専門的な知識や技術を身に付け、地域を守りたいと思います。更に、イノベーションスクールを通して国際ネットワークに参加し、同じような課題を抱える他国の人の話を聞くなどして、多様な視点から課題を解決する道を模索したいです。世界中の仲間と真剣に話し合える機会を持てるのが楽しみです。

趣旨に賛同する人の 多くの参加を

シンポジウムでは、ボードメンバー、各クラスターの教師・生徒が活動内容を紹介すると共に、意気込みを熱く語った。「OECD東北スクール」の成果を継承し、未来に向けて発展させていくという強い思いが伝わってきた。

また、シンポジウムで強調されたのは、本ネットワークが開かれた取り組みであることだ。次世代に向けた学びの開発は、教育関係者にとつて最大の関心事の1つといえる。鈴木寛東京大教授は、「テーマに興味を持って『一緒にやりたい』という思いを抱く多くの人々に参加していただきたい」と呼び掛けた。

今後、本ネットワークは、OECDのワーキンググループと連携して理論面の構築を推進すると同時に、各クラスターが教育現場で実践を重ね、21世紀型の人材育成の手法や評価法の確立を目指すことになる。本ネットワークの今後の活動が大いに期待される。

限られた環境で、探究学習をどう深めるか

探究学習の必要性を感じながらも、実際に行うのは難しい。そうしたジレンマを感じる中、4月号の特集テーマは「探究学習」であり、とても読み応えがあった。実践事例で紹介された3校に共通していたのは、「総合的な学習の時間」などを使って探究学習の時間をきちんと確保しており、活動の目的が教師間でしっかりと共有されていることだった。校内で研鑽し合いながら、より自校に合ったスタイルを確立していることに刺激を受けた。

〔東京都・私立東京農業大学第一高校・小堀健二〕

チームワークを重視することの大切さに共感

4月号の「チカラ アワセテ」で、福岡県立田川高校の山口勝利先生と山形啓二先生の師弟関係の話を興味深く読んだ。教師はともすれば1人よがりになりがちだ。この2人のように、チームワークを重視して取り組んでいる姿勢は大切だと思つ。

〔長野県・匿名希望〕

生徒の自信と自主的な学習につながる部活動

4月号の「ハートをかがせ！」で紹介された富山県立南砺平高校の郷土芸能部の活動にとっても共感した。本校でも、フラダンス同好会が活躍していて、同じような雰囲気だ。こうしたことが、生徒の自信につながり、生活を見直し、学習に結び付くことが出来ればと思つ。

〔宮城県・私立常盤木学園高校・高谷将宏〕

Reader's VIEW

Volume 2

読者のページ

読者の先生方からのご意見を紹介します

生徒と良好な関係を築ける「未来づくりシート」

4月号の「改良！指導ツールピフオーアフター」で紹介された、初期指導で活用できる「未来づくりシート」が参考になった。新入生は様々な思いを抱いて入学してくる。高校生への切り替えを急ぐことも必要だが、生徒自身の思いを受け止めて生徒と教師の良好な関係を構築していくことも重要だ。「未来づくりシート」はそのための工夫がなされていた。

〔和歌山県・匿名希望〕

大きな変化にチャレンジする必要がある

4月号の「半歩未来を考える教育オピニオン」で取り上げられた大学入試改革は、義務教育ではない高校教育に非常に大きな影響を与えるものだ。特集で取り上げられていた「探究学習」と「アクティブ・ラーニング」の実施を促すものとなるだろう。授業で求められるものが以前とは根本的に異なることに、我々教師は真摯に向き合い、チャレンジする必要があると痛切に感じた。

〔岩手県立花巻北高校・川村俊彦〕

教師川柳

ぐんぐんと伸びよ高一未来まで

福島県・匿名希望

『VIEW21』高校版はウェブサイトでもご覧いただけます！

本誌の最新号、及びバックナンバーは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで公開しております。誌面のPDFや「改良！指導ツール ピフオーアフター」の図版もダウンロードできます。ぜひご利用ください。

詳しくは

VIEW21 高校版

検索

<http://berd.benesse.jp/magazine/kou/>



編集後記

◎4月から『VIEW21』高校版編集部のメンバーとなりました、廣田と申します。今号が初めての取材でしたが、どの先生方も、全身全霊で生徒に向き合っている様子がうかがえました。そして、その先生方の想いがしっかりと生徒に届いていることが分かり、学校現場の魅力を感じることが出来ました。これから、先生方にお役立ただけの情報をお届けしていきたいと思っています。どうぞ、よろしく願いいたします。(廣田)

VIEW21 6月号 Vol.2

2015年6月23日発行

発行人 山崎昌樹
編集人 春名啓紀
発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸 満、二宮良太、長谷川敦
撮影協力 荒川 潤、川上一生、田中秀和、谷口 哲、ヤマグチイッキ
イラスト協力 伊藤美樹

VIEW21編集部
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2015

VIEW21

2015
August
8月
Volume 3

次号は
8月21日発行(予定)

『VIEW21』高校版は
年6回の発行です

COVER STORY

教師 生徒 肖像

最後まで勝負！

表紙の学校 愛知県立新川高校 ^{しんかわ} 長瀬 敦先生



長瀬敦先生の物理の授業はちょっとした緊張感に包まれる。1回の授業でクラスの半分の生徒が当てられるからだ。「分かりません」と答えるのは許されない。それは、考える気がないのと同じだから。分からなければ、周りの生徒に聞いて答えてもよし、「〇〇が分かりません」と言えば、先生はヒントを出す。その授業スタイルは、「私たちとやりとりしながら、分からない点を丁寧に説明してくれる」と生徒に好評だ。「自分の頭で理解しているからこそ、言葉にして説明できます。生徒と対話して、理解度を確認し、理解が不十分な箇所は言葉を換えて説明します。そうやって、周りに助けられながらも、生徒に最後まで考え抜いてほしいのです」と、長瀬先生は言う。

担任としても、3学年主任としても、生徒との対話を大切にする。「本校の生徒は明るくて素直。でも、目的意識の希薄さに、歯がゆさを感じています。ですから、常に目的を意識させようと、こまめに声を掛けています」。3学年で新しいクラスを受け持つ今は、毎日、日直と面談し、志望校への思いや部活動の様子などを聞く。生徒が書く学習記録には、毎日コメントを書いて返却し、学習状況もつかむ。そこまでは、それぞれが目標に向かっていける指導をいち早くしたいと思うからだ。「最後まで諦めずに努力した経験は、その後の大きな自信になり、社会で厳しい状況に直面しても、乗り越えようと頑張れます。1人でも多くの生徒をそう導きたいのです」。

実は、先生は学年主任1年目。何もかも初めての経験だが、5年連続して3学年担任を務めてきたという自負もある。「分からないことは、先輩の先生方にどんどん聞いています。正直、周りに助けられています」。生徒の希望進路の実現に向け、学年団で力を合わせて最後まで勝負を挑む。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume2 2015年6月号

2015年6月23日発行/通巻第352号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Corporation 2015

お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00/土 8:00～17:00 (祝日・年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17